

論 説

帝国議会秘密会議事速記録の公開経緯・再考（2・完）* ——芦田小委員会速記録の公開問題を中心として——

鈴木 敦

〈目 次〉

はじめに

第1章 芦田小委員会の位置づけ

第1節 位置づけをめぐる議論

第2節 小委員会速記録の検証

第3節 秘密会の法令上の根拠

第4節 占領下の秘密会の限界

第2章 秘密会議事速記録の公開経緯

第1節 速記録公開要求の始まり

第2節 速記録公開が遅れた理由

第3節 公開に至るまでの諸段階（以上、78号）

第3章 英訳速記録における削除問題

第1節 英訳に見られる削除の実態

第2節 プレス・コードによる制約

第3節 削除に関する若干の疑問

第4節 速記録原本と活字翻刻版

おわりに（以上、本号）

* 本稿における史資料等の引用においては、旧字を新字に、踊り字を通常の文字に、漢数字をアラビア数字に改めるなど、通常の許容限度の範囲内で修正を加えている。なお、筆者による補筆・挿入は〔 〕で括った。

第3章 英訳速記録における削除問題

第1節 英訳に見られる削除の実態

1 速記録公開と新聞報道

1995年9月29日に衆議院事務局が芦田小委員会速記録を公開すると、翌30日の全国紙朝刊は一面でこれを取り上げるとともに、特集記事を組んで詳報した。このことから、秘密会速記録の公開が当時どれだけ注目を浴びる出来事であったのかがうかがわれるであろう。そして、これにより明らかになったのが正式な速記録の全貌であり、英訳時の削除を示す書込みの実態であった。

当時の新聞報道には、いくつかの共通する指摘が見られる。第一に、削除の件数である。各紙報道によれば、削除箇所は「41カ所」にのぼるとされたが¹⁸⁵⁾、読売新聞は、その件数が衆議院事務局調べによるものであったことを伝えている¹⁸⁶⁾。速記録公開翌日の報道という時間的制約を考えると、各紙の内容が同様であるのは、その情報源が同一であったからだと推測して間違いないであろう¹⁸⁷⁾。

第二に、削除の対象となった発言内容である。各紙は、すべての削除箇所を網羅的に列挙したわけではなかったが、主な発言を類型化するとともに、それぞれの類型の注目される具体例を掲載した。その内容は概ね、①第9条をめぐるデリケートな議論、②マッカーサーやGHQの関与が認められる議論、③皇室財産をめぐる議論に大別されている¹⁸⁸⁾。

第三に、発言の削除が行われた根拠である。この削除根拠として挙げられているのが、連合国最高司令官指令の一つである「プレス・コード」であった。なお、発言の削除は、日本側の自主規制という形で実施されたた

め、プレス・コードとは別に、日本側にとって不都合な部分も削除されるなど政治的配慮が働いた可能性も指摘されている¹⁸⁹⁾。

小委員会速記録が公開され、その概要が大々的に報道されると、芦田修正の「真相」や憲法「押しつけ」論をめぐる議論が再び活性化したことは、本稿でも既にふれたとおりであるから、その詳細を繰り返す必要はないであろう。ところで、興味深いことに、速記録の公開によって小委員会の審議内容が大きな注目を集めたこととは対照的に、英訳に見られた削除の実態について新聞報道以上に詳しく検証した研究は驚くほど少なく、その後も十分に解明されていないのが現状といえる¹⁹⁰⁾。このような問題意識から、以下では、一連の新聞報道を出発点に、筆者による調査の結果を踏まえつつ、順次再検証を進めることとしよう。

2 「41カ所」の意味

まず、「41カ所」とされてきた削除件数の検証から始めたい。新聞報道でも言及されているとおり¹⁹¹⁾、小委員会速記録の原本には、英訳時に削除すべき発言を検討した際の生々しい書込みが数多く見られる。ただし、1995年に公刊された活字翻刻版速記録には、削除箇所を復元した速記録全文が収録され、これらの書込みに関する情報は一切盛り込まれなかった。速記録公刊の目的が秘密会の正確な審議内容を国民一般に広く知らしめることにあったとすれば、この判断はむしろ当然であったといえるであろう。

しかし、このような事情から、英訳時の削除箇所を特定するためには、活字翻刻版速記録と英訳速記録とを照らし合わせながら確認するという煩雑極まりない作業が必要であり、管見の限りでは、全削除箇所について両者の比較対照を行った先行研究は見られなかった。

そこで、本稿では、速記録原本を直接確認したうえで¹⁹²⁾、原本に見られる書込み箇所の一覧資料を作成するとともに、英訳速記録との比較対照

から実際に削除が行われた箇所のリストアップを試みた（本稿末尾に掲載した【資料2】を参照）。

ここでの検証作業からは、少なくとも次のことを指摘できるように思われる。第一に、「41カ所」という削除件数は、削除の該当箇所が41件あったということを意味するものだと考えられる。速記録原本に見られる削除指示は、亀甲括弧〔 〕及びカギ括弧「 」によってなされており、これと合わせて欄外に「トル」・「トルコト」などという書込みがあるのが通例となっている。このように直接的に削除を指示する書込みは、筆者の確認できた限りでは39箇所であったが、これに加えて英訳速記録からは更に2箇所の削除が確認できた（【資料2】No.4,13）。なお、「41カ所」の削除のなかには、複数の委員らの発言にわたる削除をまとめて1箇所と扱っているものもあれば（同 No.74-78）、委員の単一の発言に対する複数箇所の削除を個別に扱うものもあることが注目される（同 No.102）。そして、これらの削除箇所を委員らの発言別・削除部分別に分けると、その合計数は53箇所となる。

第二に、英訳時になされた邦文速記録に対する削除の文字数を合算すると、概算で5,000字を超える分量にのぼることである。この分量について、全13回にわたる小委員会の審議に占める割合としては微々たるものにすぎないとの見方もありえよう。しかし、これらの削除箇所は、速記録のなかでは最も率直な意見が示されている重要な部分であり、後述のとおり、ここからは審議過程における委員らの基本的態度の一定の傾向性をうかがうこともできる。このことを考えたとき、その分量は決して少なくないというべきであり、この意味においても、速記録全文が公開されたことには大きな意義があったといえるように思われる。

３ 削除対象の類型

次に、削除対象となった発言の類型とそれぞれの件数を改めて確認してみよう。速記録の英訳時、誰の発言が何件削除され、また、いかなる内容を含む発言が主な削除対象となったのであろうか。このような関心から、全削除箇所を発言者別・発言内容別にまとめたものが以下の図表である。ここに一見して顕著なことは、削除対象となった発言が、圧倒的に「９条関係」と「GHQ 関係」に集中していることであろう。全53箇所のうち実に42箇所までもがこの二類型に分類できるものであり、その意味では、削除の主要部分といってよい。

このうち「９条関係」の削除で最も注目されてきたのは、1946年７月30日の第５回小委員会に政府委員として出席した金森徳次郎の発言である。金森は、政府案の１項・２項関係について説明を求められた際に、将来の

【図表】 発言者別・発言内容別の削除件数

	９条関係	GHQ 関係	皇室関係	その他	合 計
廿日出 庵			２	１	３
北 吟吉		１		２	３
笠井 重治		４		１	５
鈴木 義男	１	５	１		７
犬養 健	３	１			４
芦田 均	３	７	２		12
金森徳次郎	１	10	１		12
佐藤 達夫	２	２			４
吉田 安	２				２
鈴木 隆夫				１	１
合 計	12	30	６	５	53

* 1 筆者作成。なお、削除件数の算定は発言者別・内容別のため、「41カ所」とはなっていない。

* 2 発言の分類は、主たる関心対象となっている項目に含めた。例えば、皇室財産についての GHQ の意向が問題とされている場合には、「GHQ 関係」に分類している。

再軍備の可能性を示唆する発言をした（【資料2】No.63）。このため、同発言の含意に注目した委員らの指摘とそれへの応答は全面削除されており、9条をめぐる速記録の削除は殆どここに含まれている（12件中11件）。速記録が関心を集めてきた主たる理由が「芦田修正」であったことを考えたとき、この内容は改めて注目に値するであろう¹⁹³⁾。

また、「GHQ 関係」の削除では、①憲法草案への GHQ の関与を示唆する発言や、② GHQ への批判を含む発言も含まれているが、その中心となっているのは、③ GHQ 側の意向を報告・説明し、または忖度しつつ、それに配慮しながら草案修正を検討している発言である。このような観点から発言者別の削除件数を見たとき、まず金森と芦田の発言が多いことに目が留まる。もっとも、金森は政府委員として GHQ 側との折衝を説明する立場にあったこと、また、芦田は幣原内閣の閣僚として早くから背景事情を把握していただけて¹⁹⁴⁾、自らも民政局のメンバーと連絡を取り合う立場にあったことを考えれば、両者の削除件数の多さは当然ともいえる。むしろ、ここで注目されるのは、次に発言削除の多い鈴木（日本社会党）と笠井（無所属倶楽部）の双方が、いずれも GHQ 側と直接折衝をしていた事実である（例えば【資料2】No.68, 98）。

既に言及したとおり、秘密会である小委員会の審議において、「GHQ の意向」という厳しい制約があったことは当然といえよう¹⁹⁵⁾。そして、これらの発言削除が行われた結果として英訳速記録に現れることとなったのは、実態よりもはるかに自主的・自律的に草案の修正審議をしているかに見える委員らの姿であった。

第2節 プレス・コードによる制約

1 プレス・コードと GHQ による検閲

英訳速記録に見られる多量の削除は、いかなる根拠に基づいて行われた

のであろうか。衆議院事務局側の説明によれば、これらの削除は、1945年9月19日付の連合国最高司令官指令である「プレス・コード」（SCAPIN-33）¹⁹⁶⁾に基づく出版検閲によるものであったという¹⁹⁷⁾。以下の本節では、このような説明を前提に、まずGHQによる出版検閲を概観したうえで、プレス・コードが議事速記録等に対して与えた制約を、関係資料に基づきながら検討していくこととしよう。

GHQによる占領下日本での表現活動への制限は、同年9月10日付の「出版及び言論の自由に関する覚書」（SCAPIN-16）¹⁹⁸⁾に始まるが、日本側ではその趣旨が十分に理解されなかったこともあり¹⁹⁹⁾、放送及び発行停止処分を受けるメディアが相次いだ²⁰⁰⁾。このため、同指令を具体化するものとして日本側に提示されたのがプレス・コードであった。その内容を日本側に伝える当時の資料を、以下に確認しておきたい。

米国太平洋陸軍総司令部

参謀次長 民間検閲部

昭和20年9月21日

— 日 本 出 版 法 —

連合軍総司令部の意を受けて、日本に出版の自由を確立するために日本出版法を発令する。此の出版法は、出版を制限するものでなく、寧ろ、日本の出版機関を教育し、出版の自由の責任と重要性とを示さうとするものである。従つて報道の真实性と宣伝の排除といふことに重点を置いてゐる。此の出版法は日本の凡ゆる新聞紙の報道、論説、広告及び総ての出版物に適用するものである。

その全文次の通り。

- 一．報道は嚴重に事實に基かねばならない。
- 二．直接にせよ間接にせよ公安を妨ぐるやうな記事を掲載してはなら

ない。

- 三. 連合国に就いての虚偽又は破壊的批評を掲載してはならない。
- 四. 連合国占領軍に就いて破壊的批評や占領軍に対して不信、又は怨恨を招くやうな記事を掲載してはならない。
- 五. 公式に発表されない限り、連合国軍隊の動静を掲載してはならない。
- 六. 報道記事は事実を記し、記者の意見は少しも加えてはならない。
- 七. 報道記事は宣伝価値を持たせる様に色づけてはならない。
- 八. さして重要でない報道記事を誇張したり、宣伝的意味をつけたしてはならない。
- 九. 報道記事は関係ある事実又は詳報を省略して歪める様なことをしてはならない。
- 十. 新聞編集に当って宣伝の為にする目的をもって必要以上に重要性を報道記事に付与してはならない。

以上²⁰¹⁾

GHQ による検閲は、参謀第二部（G-2）を総本部とし、その下に置かれた民間諜報局（Civil Intelligence Section, CIS）に属する民間検閲局（Civil Censorship Detachment, CCD）が担い、同局が廃止される1949年10月31日までの4年2カ月間にわたって実施された²⁰²⁾。

上掲の資料は、この民間検閲局名義の文書であるが、前文に見られるように、プレス・コードは公文書をも検閲対象として運用されたため、占領下においては、帝国議会の議事速記録及び国会の会議録もその適用を受けることとなったわけである。

本稿の関心からすると、GHQ の検閲で注目される特徴は二点ある。第一に、民間検閲局が実施した検閲は、日本占領の基本原則とされた間接統

治とは異なり、「日本政府を介在させない直接統治」²⁰³⁾であったことである。このため、悪質なプレス・コード違反行為については軍法会議による訴追が行われ、違反者は重労働・国外追放・禁固刑などに処せられることとなっていた²⁰⁴⁾。

第二に、民間検閲局は秘密機関であり、「その活動は全占領期間を通じて非公然で、一般メディアに登場することは許されなかった」²⁰⁵⁾ことである²⁰⁶⁾。例えば、民間検閲局は自らが事前検閲及び事後検閲を行ったが、検閲の手続を具体的に示した資料には、事後検閲の実施手続として、出版物の発行者に対して次のような項目を提示していた点が注目される。

六、検閲に関し記述し、又は何等かの技術的方法によつて検閲事項を暗示することは之を禁ず。

墨による記事の削除、二重刷による変更、及び空白の残置も之を許さず。同様に伏字、例へば点（・・・・）丸々（○○○）ばつばつ（××）の使用もその目的の如何を問はず之を禁ず。²⁰⁷⁾

つまり、GHQによる出版検閲が実施されていること自体が公けにならないように、伏せ字等を用いることで検閲の痕跡を残すことが厳格に禁止されていたのであった²⁰⁸⁾。

2 プレス・コードに対する官庁側の対応

さて、このようなプレス・コードに基づく出版検閲に対して、日本の諸官庁はどのように対応したのであろうか。この点につき、1946年1月22日付の終戦連絡各省委員会議事録には、終連第一部第一課長からの報告として、以下の記録が残されている。

- ・ 9月19日附“Press code”指令ニ依リ記事発表禁止ニ関スル米軍側標準ノ指示セラレタル次第ハ当時関係者ニ連絡説明致シ置キタルカ過般官報所載ノ衆議院質問記事中右指示ニ抵触スル所アリトテ若干悶着アリタル事例ニモ顧ミ本件指示事項ハ官庁出版物ニ対シテモ適用セララルモノナルコト御注意申シ上グ²⁰⁹⁾

ここにプレス・コードに基づく検閲が、「官庁出版物」をも対象とすることが日本政府側においても確認されたといえることができる。この報告を受けて、樫橋渡内閣書記官長は、1946年1月24日付で「日本ノ遵守スベキ出版準則ニ関スル連合軍最高司令官覚書ニ関スル件」（昭和21年内閣閣甲第20号）という以下の通牒（通達）を発している²¹⁰⁾。

1月22日終戦連絡中央事務局ニ於ケル各省連絡会議ニ於テ同中央事務局係官ヨリ昭和20年9月19日附覚書ヲ以テ連合軍最高司令部ヨリ指令アリタル日本側ノ遵守スベキ準則ニ関シ右ハ一般出版物ニ適用アル外、官庁出版物ニ付テモ適用アルニ付特ニ留意方要望アリタルニ付テハ右御承知相成度本件覚書添付ノ上此段依命通牒ニ及ビ候²¹¹⁾

鈴木隆夫によれば、本通牒は衆議院書記官長宛にも送付され²¹²⁾、これにより占領下を通じてプレス・コードに抵触する発言は、「議長の職権によつて削除され」ることとなった²¹³⁾。なお、当時の衆議院書記官長は大池眞であり（1945年10月～1947年5月）、同氏は国会法の下でも引き続き衆議院事務総長を務めた（1947年5月～1952年11月）。この大池の議会答弁を追ってみると、占領末期の1951年10月15日に開かれた衆議院議院運営委員会の席上で、議長の職権による国会会議録中の不穏当発言の削除が問題とされた際に、次のような注目すべき発言をしていたことが確認できる。

私から補足的に申し上げておきます。議長は議長としての立場でおやりになつて、不穏当な箇所があれば、速記を調べた上で適当な処置をいたしますとお断り申し上げて、なるべくやつていただくようになっておりますが、かりにお断りがない場面がありましても、プレス・コードというものがありまして、これに違反をいたしました場合には、議長が云々ということになしに、その速記録の発行者が責任を負わなければならぬということになつて、その点、プレス・コードだけの関係では議長のみではない。もちろん議長にご報告はいたしておりますが、発行しておる者として、どうしても残しておいたら問題になるであろうと思うようなところは、残し得ないような関係がありますから、その点は御了承願います。²¹⁴⁾

ここからは、衆議院議長の職権に基づく発言の削除に加えて、事務局側の責任として衆議院事務総長の判断による削除が行われていた実態がうかがわれるであろう²¹⁵⁾。実際に大池は、1958年7月10日に開かれた内閣憲法調査会の「憲法制定の経過に関する小委員会」に参考人として出席し、占領下でのGHQへの速記録等の翻訳提出について証言した際にも、自らが提出物に眼を通してプレス・コードの第3項及び第4項に基づく削除を実施したことを証言している²¹⁶⁾。

なお、大池による前出の答弁は参議院での動きを受けたもので、1951年10月9日に開かれた参議院議院運営委員会では、近藤英明参議院事務総長、佐藤尚武参議院議長、奥野健一法制局長が、占領下でのプレス・コードに基づく国会会議録の削除の義務に言及しており、参議院においても同様の手続が取られていたものと思われる²¹⁷⁾。

ここで注目しておきたいのは、プレス・コードに基づく議事速記録及び

国会会議録の削除は日本側の自主規制という形式で実施されたという事実である。このことは、議院における運用が民間検閲局の実施した検閲とは微妙に異なる形で展開してゆく要因ともなった。

3 プレス・コードに基づく削除の実例

プレス・コードに基づく国会会議録の削除の例としては、1951年1月27日に開かれた衆議院本会議における日本共産党議員の川上貫一の答弁に対するものが最も有名といえる。同月25日の本会議では吉田茂首相による施政方針演説が行われていたが²¹⁸⁾、これに対する川上の代表質問には占領軍に対する批判が多分に含まれていたため大きな問題となった。その内容は、①中ソを含む全面講和の要求、②講和後の全占領軍の撤退、③軍事基地絶対反対などを主張するもので、川上の演説は50分にも及んだとされる²¹⁹⁾。この演説の直後、岩本信行衆議院副議長から、「ただいまの川上君の発言中不^レ適^レ当の言^レ辞があつたようでありますから、速記録を取調べの上、適^レ当の措置を講じます」との指摘があり、川上の代表質問は、結果的に48箇所もの削除を受けており、該当部分の国会会議録には4頁にわたる夥しい削除の痕跡が確認できる²²⁰⁾。そして、この削除の根拠とされたのがプレス・コードであった²²¹⁾。

ここで注目されるのは、1949年10月の民間検閲局の廃止以降も、国会ではプレス・コードに基づく削除が実施されていた点であろう。これは、先に見たように、日本の官庁側における対応が自主規制の形を取っていたことを受けたものといえるが、GHQによる検閲が正式に廃止された後の発言削除の妥当性は疑問の残るものであった。

また、川上の発言削除の形式が棒線によるものであった点も注目に値しよう。一般に、会議録上の不穏当発言の処理手法については、①議長あるいは委員長の職権行使が明確な「――」により削除の跡を残す方法（棒線

削除）と、②発言の前後を繋いで痕跡を残さない訂正的要素の濃い方法（ジョイント）の二種類があるとされる²²²⁾。

芦田小委員会速記録における削除が「ジョイント」によるものであるとすれば、本件の国会会議録における削除はまさに「棒線削除」に当てはまるものといえるであろう。なお、会議録は、原則として議会における答弁に基づくものであり、既に行われた発言のすべてを完全に無きものとすることはできない。このことから、プレス・コードに基づく削除であっても、公開の議会においてなされた発言については、川上以外の場合にも棒線削除が原則となっていたようである。これは見方によっては、GHQ が禁じた検閲の痕跡を残す手法であるが、会議録に関する削除に特有の性質がうかがわれよう。

ところで、長く参議院事務局参事を務めた前田英昭によれば、「取り消された不穏当な発言が会議録から削除されるという場合の会議録とは、公表する会議録のことであって、原本たる議院に保存される会議録の上からは削除されない」²²³⁾という。実際に、日本社会党議員であった小川国彦は、戦後の国会会議録から削除された発言の記録が議院事務局に残されていることを明らかにしたが²²⁴⁾、小委員会速記録の場合も同様の形で、完全な原本が保管されていたものと考えられるであろう。

4 小委員会速記録削除の実行者

1948年に芦田小委員会の英訳速記録が作成される過程で、削除を実行した主たる人物は誰であろうか。この疑問を解明する直接証拠はないものの、残された状況証拠から消去法的に該当者を限定してゆけば、それは大池眞事務総長を置いてほかにいないであろう。以下では、このように考える根拠を示してみたい。

まず、速記録公開当時の毎日新聞は、政治的配慮に基づく速記録削除の

可能性に言及しつつ、「翻訳の際に削除されたことは間違いないが、事務局の判断で出来るものではない。責任ある立場からの指示で削除がなされたのだろう」とする衆議院関係者の証言を紹介している²²⁵⁾。しかし、既に確認してきたとおり、プレス・コードを根拠とする速記録等の削除については、発行者の責任として事務総長が独自に判断を下していたと考えられ、事務局側での削除も理論的にはありえたことが指摘できる。

また、事務総長の依頼を受けて英訳作業に携わった翻訳課長心得（当時）の滝口紀男も、削除を指示された覚えはないとしており、「事務総長が『ここはない方がいい』などと言っているのを聞いたことがある」との証言を残していた点が注目される。朝日新聞は、この滝口証言を受けて、「削除は全訳を受け取った事務総長の所で行われたとしか考えられない」とする²²⁶⁾。しかし、削除の実行者が事務総長であるとの推測はよいとしても、速記録全訳後にジョイントによる処理を行うこととなれば、削除箇所の前後を繋ぐための部分的な翻訳修正は不可欠であり、これを別の人物が行うことは困難を伴うものであろう。このような煩雑な作業を、秘密裏に翻訳を依頼するような人物が自ら実施したとは考えがたい。

なお、この問題について、読売新聞は、「衆院事務局によると、GHQ から提出命令があった当時、鉛筆書きの速記録をペン書きに直して『上層部』に提出。その後プレスコード部分が削除されたものが戻ってきたため、削除部分を除いて翻訳してGHQに提出した、との当時の担当者の聞き取りメモが残っている」²²⁷⁾との重要な証言を掲載している²²⁸⁾。

以上の各紙報道の再検証からは、次のことが指摘できるであろう。第一に、GHQ の全訳提出要求を受けて初めて、小委員会速記録は鉛筆書きからペン書きに直されたことである。そして、この結果1948年に作成されたペン書きの速記録こそが、衆議院憲政記念館が現在所蔵する原本であると考えられる。

第二に、議院事務局が作成したペン書き速記録が「上層部」に提出され、そこで削除箇所の特定が行われたことである。この上層部に大池が含まれ、削除箇所の特定に主要人物として関与したことは事務総長の職務からしても疑いがないであろう。また、後述するように、速記録原本に対する書込みは主として赤鉛筆と青鉛筆の二つで行われており、削除箇所の特定に当たっては二重のチェックが行われた可能性が指摘できる。このことを踏まえれば、衆議院法制部（1948年7月に衆議院法制局として改組・独立）の関係者らの関与も十分に考えるものと思われる²²⁹⁾。

第三に、翻訳担当者らに渡された速記録は原本と異なる削除済みのものであったということである。後掲の【資料2】からも分かるように、速記録原本には削除指示以外にも夥しい量の書込みがあり、これを頼りに削除箇所を確認しつつ翻訳が進められたとは思われない。また、英訳速記録には速記録原本の内容とは正確に一致しない点がしばしば見られることも注目される。これらのことから、原本とは別に削除済みの日本語速記録が作成され、これを元にした英訳速記録が、ほぼそのままの形で GHQ へと提出された可能性が高いといえるであろう。

第3節 削除に関する若干の疑問

1 速記録英訳時の削除への疑問

前節では、主として議院事務局側の記録・証言を前提にして、プレス・コードによる速記録への制約の実態と、小委員会速記録の英訳作成までの経緯を明らかにしてきた。以下の本節では、この検証過程で生じた疑問を提示してみたい。

それは、そもそも GHQ への英訳提出に当たってプレス・コードの適用が必要であったのかという疑問である。GHQ に提出される速記録は「出版物」というべきものではなく、ましてや一般公開を想定したものとはい

えないであろう。したがって、形式的に見れば、これがプレス・コードに抵触するものとは考えがたいように思われる。

近代日本メディア研究を専門とする山本武利が端的に指摘しているように、GHQ による検閲の主目的は「マッカーサーのための情報管理と世論操作」²³⁰⁾であった。また、そうであればこそプレス・コードは民間の出版メディアだけでなく、官公庁の公文書を含むすべての出版物を対象にしたはずである。こうした情報統制の客体は、言うまでもなく占領下にある日本国民であり、占領者である連合国側ではありえない。このように考えたとき、GHQ の要求を受けて英訳提出された小委員会速記録に対して、日本側がプレス・コードを適用して速記録中の発言削除を行うというのは主客転倒した論理であろう。

これはプレス・コードに基づく速記録の削除が日本側の自主規制によって行われていたことから生じた事態であるが、このような経緯から、日本側にとって不都合と思われる部分についても、プレス・コードの基準にはそぐわない削除が行われたことが指摘されてきた。その典型として挙げられるのは、前出の金森発言の削除である。政府側の大臣が制憲過程の段階から将来の再軍備の可能性を考慮していた事実は、いまだ占領下にあった日本にとって秘匿すべき重大な問題と考えられたとしても不思議ではない。とはいえ、速記録公開を主張し続けた森清も「何故これがプレスコードに抵触するとして、削除したのか分からない」²³¹⁾と述べるように、本件削除をプレス・コードによって合理的に説明することは困難であろう。

2 速記録削除に関する初期の証言

実際に、1955年作成の衆議院事務局内部資料には、削除部分は「国家に重大なる不利益を及ぼすのおそれがあり不穏当と認めて削除したもの」²³²⁾であるとの記述も見られ、これはプレス・コード以外の政治的配

慮に基づく判断があったことを傍証するものといえる。

なお、この点については芦田も、1954年4月7日開催の改進黨憲法調査会総会において、「当時連合軍司令部は、秘密会の議事についても詳細に報告しろと命令した。しかし率直に言つて、速記をそのまま司令部に通ずることは望ましくないという場合がときどきあつたから、そのときには多少手を加えて速記録を出してある、あとで発表するとそれがばれます。それでは困る」²³³⁾とする衆議院事務局の見解を紹介していた。

また、近年新たに発見された萍^{うきぐさ}憲法研究会（月曜会）の速記録中に見られる佐藤達夫の発言も注目される。同会は、現行憲法の制定に関わった貴族院勅選議員の有志を中心に、1953年という主権回復後の早い段階から、憲法制定の経緯を正確に記録しておくこと等を目的に活動した組織であるが、1955年5月に開かれた研究会では、小委員会速記録の公開にかかわる議論のなかで以下のような発言があったことが記録されている。なお、「小林」とは貴族院書記官長を務めた小林次郎、また、「牧野」とは勅選議員として審議に参加した刑法学者の牧野英一である。

小林 貴族院では速記をつけたところとつけないところとあるのです。

速記をつけないで要領筆記だけつけたのが大部分です。衆議院では小委員会の速記を全部とったのですね。

佐藤（達） あそこは全部とったのです。それがG・H・Qにその都度報告したのと内容が違うものだから具合悪いという点もあったのですな。

牧野 詭弁を弄したのだな。²³⁴⁾

佐藤は、ここで直接的に英訳速記録に触れているわけではないが、当時GHQに提出されていた記録（英訳要録もしくは英訳速記録）には一定の

政治的配慮が働いていたことをうかがわせる発言をしている。なお、佐藤はこの後も、「詭弁を弄したのだな」という牧野の発言を否定しておらず、出版検閲の都合でそうだったとは述べていない。

ここで注目されるのは、1954～1955年の段階では、衆議院事務局も、小委員会速記録に対する削除の根拠としてプレス・コードを挙げていない点であり、また、それゆえに一般的にも、削除がそのような理由から行われたとは考えられていなかったように見受けられる点である²³⁵⁾。

3 「口実」としてのプレス・コード？

それでは、プレス・コードが小委員会速記録の削除根拠として言及され始めたタイミングはいつ頃からなのであろうか。管見の限りではあるが、小委員会速記録の削除に関する大池自身の証言は見当たらず、本件削除についてプレス・コードを根拠とした最初の例は、1957年10月25日付の鈴木隆夫論文の草稿であると思われる²³⁶⁾。

この前提が正しいとすれば、「小委員会速記録の削除はプレス・コードを根拠に行われた」という主張は、少なくとも削除の実行者によるものではないことになる。もちろん、これまで確認してきたように、事務総長時代の大池は、しばしばプレス・コードを根拠に国会会議録からの発言削除を行ってきたと見ることができる。したがって、これらと同様に大池自身が実行したと思われる英訳速記録における削除についても、同じ発想から単純にプレス・コードを根拠としていた可能性は否定しきれない。そして、仮にそうだとすれば、プレス・コードを適用したこと自体の妥当性も問題となりえよう。

しかし、戦後も長きにわたり健在であった大池が、この問題に関して公的な場面で具体的証言を残さなかったことには疑問が残る。実際にプレス・コードが英訳時の削除の主たる根拠であったならば、議会における自

身の答弁と同じく、議院事務局側の責任としてプレス・コードを遵守する義務があったことを主張しても問題はないはずだからである²³⁷⁾。

このことを考えると、小委員会速記録に対する削除はいずれも、議会刊行物に対する検閲が日本側の自主規制であることを利用した、政治的配慮に基づくGHQ側への秘匿工作であったとの見方も可能であろう。また、ここからは、「プレス・コードによる削除」という説明も、政治的配慮に基づく不穏当発言の削除について、何らかの合理的根拠を示すための口実として用いられたものではなかったかという疑問も生じてくる。

もっとも、以上の議論は、あくまで仮説の域を出ないものである。ここでは、より正確な事実へと一步でも近づくため、筆者の率直な疑問を提示することで読者諸賢からの忌憚ない批判を仰ぐこととしたい。

第４節 速記録原本と活字翻刻版

１ 速記録原本の体裁

本節では、直接参照する機会の少ない小委員会速記録原本について、その特徴をまとめておくこととしたい。筆者があくまで原本にこだわるのは、同資料によってしか知りえない重要な情報があると考えからである。

小委員会速記録の原本は、衆議院浄書係の緑色縦書き罫紙を束ねた分厚い大福帳のような簿冊である。同罫紙は、縦27cm・横13cmであり、縦19マス・横5マスの95字詰めとなっている。また、罫紙の欄外には、上部に「頁」、右部分に「会第 号」・「衆議院」、左部分に「浄書係」との印字がある。なお、上部にはしばしば浄書作成時のものと思われる頁番号の書込みも見られるが、これとは別に右下欄外には簿冊ごとの通し番号が押印されている（本稿末尾に掲載した【資料３】・【資料４】を参照）。

全13回の正式な小委員会審議を記録した簿冊は、第1冊（第1・2回）、第2冊（第3回）、第3冊（第4回）、第5冊（第6回）、第6冊（第7回）、

第7冊（第8回～第13回）、第8冊（速記録索引）という形で、全8冊にまとめられている。

なお、いずれの簿冊の表紙にも「衆議院速記課」の署名があり、左上部分には「原本」という文字が朱書きされている。したがって、衆議院憲政記念館が所蔵する同資料こそが正式な小委員会速記録といえる。

2 原本への書き込み

既にくれたとおり、速記録原本には、英訳時に行われた多数の書込みを確認することができるが、他方で、活字翻刻版速記録では、これらの書込みは一切触れられておらず、研究者の間でもその詳細はあまり知られていない。したがって、ここに速記録原本への書込みの特徴を紹介しておくことも無意味ではないであろう。

まず、書込みの内容から確認しておきたい。速記録原本には、ペン書きによる細かな字句修正が見られるほかに、削除箇所の特定时のものと思われる書込みとして、①注意すべき単語や文章への傍線、②最終的な削除の有無を示す「トル」・「トルコト」または「イキ」・「イキル」の指示書き、③削除の該当範囲を示すための亀甲括弧及びカギ括弧、④削除箇所の文章への若干の補筆を確認することができる（【資料3】を参照）。

次に、書込みに用いられた筆記具である。削除箇所に関する速記録原本への書込みは、赤鉛筆・青鉛筆・黒鉛筆の三種によって行われている。速記録への書込みを確認すると、傍線にはもっぱら赤鉛筆と青鉛筆が用いられており、黒鉛筆は削除指示や補筆など最終段階の一部で用いられた程度にすぎないことが分かる。なお、書込みの内容を仔細に検討すると、青鉛筆の書き込みを赤鉛筆で囲んだ箇所があるなど、赤鉛筆による一部の書込みが青鉛筆によるものよりも後に行われたことが分かり、いずれの書込みが先になされたかある程度推測することもできる。

以上の事実から想起されるのは、戦前の内務省が実施した検閲との類似性であろう。近代日本出版史を専門とする浅岡邦雄によれば、内務省による検閲は、「検閲官が1名の場合は赤線で、検閲官が2名になると2人目は青線を引いている（一部ペン書きもある）」²³⁸⁾とされ、実際に複数の資料に赤鉛筆と青鉛筆による書込みを確認することができる。このような事実からすれば、速記録の削除箇所の特定にあたっては、複数の人物が関与していたと見る方が自然であるかもしれない。

また、削除されなかった傍線箇所の多さも指摘しておきたい。このことは、削除箇所の特定にあたり、まず「G・H・Q」や「関係方面」といった特定の単語を含む発言を機械的にリストアップしたうえで、これらにつき順次具体的な判断を進めるという手順が取られたことをうかがわせる。実際に、原文の維持を指示する「イキ」・「イキル」などの書込みは70箇所を超えており、これは削除を指示する書込みよりもかなり多いことが分かる（詳細は【資料2】を参照）。このうち削除が実施された箇所については、活字翻刻版と英訳版の比較対照によって一応は該当部分を特定することもできるが、傍線が引かれながら削除を免れた箇所については、速記録原本によってしか確認することができない。しかし、結果的に削除には繋がらなかった傍線等の書込みは、英訳時に何が問題とされていたかを正確に理解するための格好の素材であり、これらを参照する意義はなお小さくないものといえよう。

3 活字翻刻版との異同

最後に、速記録原本と活字翻刻版との異同についても言及しておく必要がある。衆議院事務局の編集により1995年に刊行された活字翻刻版速記録には、「帝国憲法改正案委員小委員会の速記録を原文に忠実に収録したものである」²³⁹⁾との説明が冒頭に付されていた。しかしながら、筆者が速

記録原本を確認した限り、この一文にはいくつかの点で注意が必要であると思われる。

速記録原本は、膨大な分量をペン書きに改めていることもあり、その作業を複数人で分担していることが筆跡からうかがえる。このためか、速記録原本の内容を細かく検討していくと、例えば「発」と「發」、「来」と「來」、「会」と「會」のように、数多くの漢字で新字体と旧字体が入り交じっていることが確認できるが、活字翻刻版は原則的に旧字体で統一されている。これは一定の編集方針に基づく整理であると理解でき、原本へのペン書きによる字句修正の多くもこの異字体の訂正に当てられている（例えば、【資料4】⑦を参照）。このような異字体の統一は、「速記録は音声の記録である」という特質からすれば当然の措置であり、読みやすさを考慮すればむしろ望ましい編集と考えることもできる。また、小委員会の審議内容を知るうえでの弊害になるとも考えがたく、その意味では殊更に問題視すべき点ではないように思われる。

もっとも、より重要な問題として指摘しておかなければならないのは、活字翻刻版には不正確な翻刻が見られることである。例えば、単純な誤植に近いものがあり（【資料2】No.63を参照）、この点については旧稿でも触れている²⁴⁰⁾。とはいえ、どれほどの重要文書であるにせよ、それが人の手によって作成されるものである限り、いかに厳密な作業を心掛けたとしても誤りや不足を完全に排除することは不可能であるし、筆者もこれを非難するつもりは毛頭ない。その意味では、むしろ、速記録自体の正確性についても今一度考えなおす必要があるのかもしれない²⁴¹⁾。

ところで、単なる誤植の範囲では説明することができないものもある。それは、速記録原本中に見られる「原文」・「原語」という字句を、活字翻刻版が「英文」という異なる意味をもつ字句に改めてしまっている箇所である。網羅的な検証ができていないわけではないが、「英文」への字句修正

は、筆者が確認しただけでも8箇所に及んでいる（【資料4】を参照）。そして、これらの字句修正は回次の異なる複数の離れた箇所に及んでいることから、誤記・誤植の類いでなく、意図的なものと断定してよい。

4 考えられる字句修正の理由

このような字句修正はなぜ行われたのであろうか。まず、ペン書き速記録が作成された時期（1948年）を考えれば、委員らの内閲を受けての字句修正でないことは明らかである。これまでの議論から思いつくのは、「編集方針に基づく整理」という説明であろう。ここでも速記録原本に当たってみると、「原文」という文言は、①「小委員会修正案に対する政府案」と、②「邦文政府案に対する英文草案」という二通りの意味で用いられていることが分かる。また、これらの二つの意味の使用件数を比較すると、①の意味での用例が圧倒的に多く、活字翻刻版は②の用例のみを修正している。したがって、これらの字句修正も、異字体の統一と同様に、読者の混乱を避けるための処理だったと見ることもできないではない。

ただし、このような説明には、直ちにいくつかの点で疑問が生じうる。例えば、②の意味での「原文」の使用例のいくつかは、なお活字翻刻版にも残っており²⁴²⁾、このような字句修正が異字体の統一ほどには徹底されていない点である。また、速記録原本のなかには、これらの字句修正とは逆に、「英文」を「原文」へと字句修正したペン書きも見られる（【資料4】⑤を参照）。しかし、この字句修正は、異字体の統一を指示するペン書きと同じ形式であるにもかかわらず、なぜか活字翻刻版では反映されていない²⁴³⁾。この事実からは、翻刻時の「原文」から「英文」への字句修正が、原本へのペン書きを行った人物の意図とは離れて行われていた可能性もうかがわれるであろう。

さらに、「英文」への字句修正は委員らによる発言の含意を失わせてし

まう虞がある点も指摘しておかなければならない。英文草案を指しての「原文」・「原語」という文言の使用は、委員らが憲法草案の日本語と英文のいずれを重視していたかを推測するための重要な手掛かりといえるはずだからである。したがって、この問題に関しての字句修正は、正しい判断ではなかったというべきであろう。

ここで字句修正を受けた8箇所の用例を委員別に分類すると、笠井重治（2回）、森戸辰男（2回）、芦田均（1回）、大島多藏（1回）、北吟吉（1回）、鈴木義男（1回）となり、小委員会審議をリードした委員らが共通して用いていたことが分かる。そしてこのことから、小委員会の少ないメンバーが、政府の憲法改正案がGHQの起草した英文草案を日本語へと翻案したものであった事実を知り、それゆえに帝国議会における審議の段階においてすら英文がより重要な意味を持つかのような認識の下に、日本語の修正審議を行っていたことがうかがわれるであろう。実際に笠井は、英文にはマッカーサーが強い影響力を発揮しているとの伝聞情報に繰りかえし言及しており、英文が無視できないことを理解していた。

速記録の公開を通じたこのような事実関係の暴露は、憲法「押し付け」論の主張を勢いづかせるという政治的な影響を容易に想定しうるものであり、その意味では、「原文」から「英文」への字句修正が行われた背景に何らかの政治的配慮があったという可能性も捨てきれない。とはいえ、そこに当時の衆議院議長や事務総長の意向が働いていたということも俄には考えがたいであろう²⁴⁴⁾。責任ある立場の者が政治的配慮から字句修正を行ったことが明るみにできれば、そのような手段はむしろ逆効果にしかならないと思われるからである。

それでは、誰が、いかなる理由で、これらの字句修正を実行したのか。残念ながら、断定できるだけの決定的証拠を筆者は持ち合わせていない。しかしながら、以上の議論から次のことだけは確認できたように思われる。

すなわち、活字翻刻版を利用する際には注意が必要であり、速記録原本を参照することにはなお一定の意義が見出されることである。

4 小 括

第3章では、英訳速記録における削除の実態について、速記録原本を用いて検証してきたが、その内容をまとめれば、以下のとおりである。

第一に、「41カ所」とされてきた削除箇所の特定を通じて、その分量が全体で5,000字を超えることを確認した。また、削除対象となった発言の分類からは、GHQ側の意向に言及した箇所が突出して多いことが分かり、審議に対する実質的な制約が小さくなかったことを改めて示した。

第二に、プレス・コードが占領下の議事速記録等に与えた影響について、①終戦連絡各省委員会における終連の報告、②内閣書記官長から衆議院書記官長への通達、③議院の自主規制による議事速記録等の削除という日本側での対応を確認した。なお、占領下では、議長の権限以外にも、議院法下の書記官長及び国会法下の事務総長の判断に基づく発言削除があったことを指摘し、英訳速記録における削除の実行者の特定を試みた。

第三に、英訳速記録における削除はプレス・コードの適用だったとする衆議院事務局側の説明に対する疑問を提示した。GHQの出版検閲の目的及び性質からすれば、GHQへの提出物であり出版物ともいえない英訳速記録にプレス・コードを適用する必要はなく、日本側にとって不都合な発言の削除を合理化するための口実だったのではないだろうか。

第四に、速記録原本と活字翻刻版との比較対照を通じて、原本の特徴を明らかにした。とりわけ、原本に対する書込みを内容と形式の両面から検証し、削除に繋がらなかった傍線箇所もリストアップして紹介した。また、これらの作業を通じて活字翻刻版に不正確な翻刻を発見したことから、その実態を紹介するとともに問題点を指摘した。

以上の検証の成果は、資料的制約もあって必ずしも十全なものとなっていない憾みがあるものの、それでもプレス・コードに基づき日本の諸官庁で行われた自主規制の実態を探るうえでの一定の手掛かりは示しえたものと思われる。

おわりに

冒頭でも述べたように、本稿の目的の一つは、芦田小委員会速記録の公開経緯を正確に描きなおすことで、小委員会が当時置かれていた状況を適切に把握するための前提条件を整えることであった。このような問題意識から、本稿では、芦田小委員会の位置づけ（第1章）、秘密会議事速記録の公開経緯（第2章）、英訳速記録における削除問題（第3章）という諸点を、史資料等に依拠しつつ縷述してきた。

本稿が明らかにした事実は、各章末尾の「小括」でまとめたとおりであり繰り返すことは控えるが、活字化された資料の客観性・完全性を自明視せずに原資料を用いることの重要性については改めて強調しておいてもよいであろう。そこで、稿を閉じるにあたり、現在の速記録原本の閲覧環境と今後への期待を付言して、結びに代えることとしたい。

既に紹介したとおり、芦田小委員会速記録原本は現在、衆議院憲政記念館が所蔵している。同館は、憲政の歴史や憲政功労者の関係資料を収集・所蔵し、これらを常設展・企画展・特別展という形で一般に公開する展示施設である。なお、所蔵資料の閲覧については、「公用及び学術用の研究又は調査をする場合に許可」されているため、基本的に研究者であれば閲覧することが可能であり、利用に当たっての親切かつ細やかな対応も特筆すべき点といえる。

とはいえ、展示施設という基本的性格のためか、必ずしも多くの利用者

を前提とした閲覧体制が整っているわけではないことも、従来から指摘されてきた²⁴⁵⁾。また、閲覧・利用に際しては、一点しか存在しない貴重な史料を直接手にする以外の方法がなく、原本を間近に確認できるというこの上ない利点がある反面、気軽に、また繰り返しかえし利用することが躊躇われることも事実であろう。

しかしながら、本稿の資料紹介は、速記録原本全体からすれば部分的なものでしかなく、不完全な内容に止まっている。また、その内容にも筆者自身の能力的限界や先入観に由来する意図せぬ誤りが含まれている可能性は否定できず、今後の更なる研究の深化が必要といえる。

2017年5月3日、日本国憲法はその施行から70周年を迎えたが、今なおその制定過程の全貌が明らかになっていないことは、本稿に残された課題からも疑いのない事実であろう。他方、時の経過によって、憲法自体の正統性を問うような政治的議論が過去のものとなった今だからこそ、実証的に憲法制定過程を論じうる環境が整いつつあると考えることもできるのではないだろうか。

入り組んだ事実関係を丁寧に解きほぐし制憲史上の謎を解明していくためには、多数の研究者による間主観的な共働作業が不可欠である。その意味においても、速記録原本の閲覧を容易にし、多数の利用を期待することができる史料のデジタルアーカイブが望まれる次第である²⁴⁶⁾。

【資料 2】 芦田小委員会速記録原本における削除箇所及び書き込み箇所

〔凡 例〕

- ① 以下の資料では、衆議院憲政記念館所蔵の「第九十回帝國議會衆議院帝國憲法改正案委員小委員会速記録 原本」のうち、鉛筆（赤・青・黒）による全ての削除箇所及び書き込み箇所をリストアップした。
- ② 翻刻部分の原本対応箇所を示すため、簿冊ごとの通し番号を備考欄に記載した。なお、ペン書きによる字句訂正は、原則として文章に組み込んだが、注目される箇所についてはそのままとし、備考欄に注記を付した。また、踊り字は改めた。
- ③ 速記録原本には、新字体と旧字体が交じっているが、以下の翻刻では敢えて表記を統一していない。なお、活字翻刻版と異なる字体の場合には圈点を、文字内容そのものが異なる場合には「ママ」を付し、必要に応じて備考欄に注記を付した。
- ④ 翻刻中に見られる傍線及び文末文頭の亀甲括弧〔 〕・重カギ括弧『 』は手書きの書き込みを意味する。なお、亀甲括弧は赤鉛筆、カギ括弧は青鉛筆が基本となっているが、必ずしもこの原則に沿っていない箇所もある。
- ⑤ 網かけ部分は、英訳速記録における削除箇所を意味する。なお、「トル」・「トルコト」や「イキ」・「イキル」といった削除の有無に関する指示書きは、該当ページ（通し番号）を示したうえで備考欄に注記を付した。

No.	回次	書き込み箇所	備 考
1	第 1 回	<p>○『廿日出委員 分リマシタ、実ハ小委員ニ推サレテ、委員トシテノ精神的ナ態度ニ付テ一言私ノ心境ヲ申上ゲタイト思ヒマス、昨日食堂ニ於テ北君ガ偶然私ノ前へ御見エニナツテ、是ガ十年経ツタラ、現在憲法改正委員会ニ関係シテ居ル役員連中ハ、翼賛会ノ幹部連中ノ運命ト同ジヤウニキツナル時ガアルダラウ、斯ウ云フコトヲ仰シヤイマシタ、実ハ私平生カラ眞剣ニ考ヘテ居ル問題デモアルシ、心ヲ踊ラセナガラ御聴キシタ、サウシテソレニ対シテ、吾々ハ十年経ツテモマダピンピン生キテ居ル、其ノ場合ニハ責任ハ全部負フ、斯ウ言ツテ居ル間ニ所用ガアツテ私ハ其ノ席ヲ立ツタノデスガ、ソレガ後デドウ云フヤウナ話ガアツタカ能力ク知りマセスガ、此ノ言葉ガ一ツ、其ノ後又引続イテ控室ヘ來ルト、現憲法ノ第三條マデハ洵ニ立派ニ出來テ居ルガ、何レアノ第三條マデヲ覆ヘス時ガ來ルダラウト、相当政治ニ経験ノアル方ガ仰シヤツテ居ツタ、是ハ併シ大シタ問題デハアリマセスガ、兎ニ角一般ノ人々ガ此ノ小委員会ニ対シテ持ツテ居ル所ノ感ジハ、余程深刻ナモノガアルヤウニ私ハ感ジテ居リマス、全ク我々ハ命懸ケデナケレバナラナイト、総テノ憲法ニ関スル會議ニ自分等ノ運命ニ付テモ考ヘテ居ルノデアリマス、要スルニ結論トシテ此ノ小委員会ハ超党派的ニ、兎ニ角此處ヘオイデニナツテ居ル方ガ自己ヲ取巻ク一切ヲ投出シテ、命懸ケデヤツテ戴クヨリ外ハナイ、実ハ斯ウ云フヤウニ思ツタ次第デアリマス、委員トシテノ精神的ナ態度ヲ一寸一言申上ゲテ置キマス』</p>	<p>原本第 1 冊 39-48 頁。 *【削除 1 の①】発言開始部分欄外（39 頁）に丸囲みで《トル》と書込み。</p>
2	〃	<p>○北（略）委員 私ハ只今ノ委員ノ発言ニ一寸私ノコトニ触レタカラ申上ゲマスガ、[...] 殊ニ我々頭デ考ヘテ居ツタコトハ、兎ニ角世界ノ大勢ハ英米流ノ「デモクラシー」ガ非常ニ強ク支配シテ居ル、日本モ國際情勢ニ鑑ミルト云フコトハ、結局戰勝國ノ態度、「ロシヤ」ノ態度、支那ノ態度スラ参照シナケレバナラス、殊ニ小委員会ノ秘密ヲ要スルコトハ、此ノ憲法ト聯合國ノ意向ナドノ問題ニ触レル時ニハ、公開シニクイ場合ガアル、[サウ云フ場合ニハ秘密ニスル必要ガアル]、憲法ヲ審議スル用意トシテハ、戰敗國トシテ日本ヲ建直スノ必</p>	<p>原本第 1 冊 48-61 頁。 *1【削除 1 の②】 *2《世界ノ大勢…》の傍線部分（54 頁）に《イキ》、同頁欄外に丸囲みで《イキ》と書込み。</p>

		<p>要ト云フコトガ勿論第一義ニ置カレバナラスガ、憲法ノ文章マデモ <u>翻訳</u>の二日本文ヲシカラザルモノヲ殘シテ置クト將來恥ニナル、思想 ノ良イ所ガアレハ採入レテモ宜イ、制度ノ良イ所ガアレハ採入レテモ 宜イ、採長補短ハ我國ノ過去ノ歴史ノ長所デアル、洵ニ虚心坦懐デ宜 イケレドモ、言葉ノ末マデモ直譯のナモノヲ殘スノハ我々忍ビス、ソ コデ將來嗤ハレナイヤウニ、ココダケハ皆サンモ御考ヘ願ヒマシテ、 私等モ其ノ氣持デアリマスカラ、御協力ヲ願ヒタイ、此ノ憲法ニハ、 斯ウ云フヤウニ考ヘテ、<u>政府ノ草案</u>ノ中ニハ直訳調ノ所ガ相当多イカ ラ、之ヲ殘サナイヤウニシナケレバナラスト思フ、私ノ考ヘハサウ云 フ考ヘデアリマスカラ、ドウカ誤解ノナイヤウニ願ヒタイ</p>	<p>*3 《政府ノ…》部分は森清監訳版 にはないが、英文には確認できる。 前掲注（86）7コマ目参照。</p>
3	〃	<p>○笠井委員 只今ノ北君ノ御説ニハ至極賛成デゴザイマス、今北君モ 仰シヤルヤウニ、直訳ノ点ガ澤山アリマスシ、殊ニ前文ノ如キハ、品 位ノ高イ、日本人トシテ肺肝ヲ貫クダケノ文章デ書カレナケレバナラ スノデアリマスガ、寧ロ英文ノ方ガ非常ニ宜ク出来テ居ツテ、ソレヲ <u>翻訳</u>スルノニ、ダラダラ牛ノ涎ミタイナ間違ツタ翻訳ガアルノデアリ マスカラ、此ノ場合ニ於テ、後世ノ日本國民カラ嗤ハレス、又世界カ ラ失笑ヲ招クコトノナイヤウニ、小委員会ニ於テ十分練リニ練ツテ立 派ナモノヲ掲ヘタイ、是ガ私ノ念願トスル所デアリマス</p>	<p>原本第1冊 61-64 頁。</p>
4	〃	<p>○北（略）委員 …… 前文ノ修正点ニ付テ御説明申上ゲタイト思ヒ マス、是ハ卒直ニ言ヒマシテ、本会議ヤ委員会ノヤウナ公開ノ席デ ハ申シニクイノデアリマス、ト云フノハ、是ハ私共英文ト日本文ト両 方一緒ニ並行的ニ起草シタモノデアルト云フ前提カラ言ツテ、日本文 ノ不正確ナ所ガ大分アリマス、併シ英文ハ、先程笠井君カラ御話ガア ツタ通り、非常ニ疑義ガアルト思ヒマスガ、其ノ疑義ハ、十分ニ出来 ナクテモ、意味ダケデモ日本文デハモット正確ニ致シタイト云フ氣持 カラ修正致シタノデアリマス、第一カラ一寸讀シテ參リマス、〔日 本國民は正当に選挙された國會議員を通じて行動〕スルモノデアツ テ、是ハ英文ヲ御参照下サレバ非常ニ結構ダト思フノデス、〔現在及 び將來のために、諸國民との平和的協力の成果と、日本國全土にわた る自由の恵沢とを確保し、政府の行動によつて再び戦争の惨禍を發生 させまいと決心し〕ノ「させまいと」ハ、元ノ方ヲ生カシテ「しない やうにすることを」トシ、「しないやうにすることを決意し、ここに 主權が國民に存することを宣言し、この憲法を確定する」、先ツ是ダ ケニ付テ修正ノ理由ヲ御説明申上ゲマス、英文ノ方カラ行キマス、 「ウイー・ザ・ジャパニーズ・ピープル・アクティング・スルー」ト、 英文デハ唯「スルー」トアルノヲ、「通じて」トナツテ居リマスガ、 此ノ「アクティング・スルー」ノ「スルー」ハ、英語ヲオヤリニナツ タ方ハ御存知デセウガ、「プレポジティブ・パーティシブル」デ「フ ー」ニ相当スルモノデアリマス、ソコデ日本國民ト云フモノノ解釈デ アリマスガ、「日本國民は正当に選挙された國會議員を通じて行動」 スルモノデアアル、ツマリ日本國民ハ大体ニ於テ國會議員ヲ通ジテ議會 主義ヲ奉ジツツ活動スルモノデアアル、何故國會ニ於ケル選挙セラレタ 議員ヲ通ジテ、トヤツタカト云フト、「國會における正当に選挙され た」ト直訳流ノ言葉ヲ用ヒマス、國會で選挙シタヤウナ印象ガ與ヘ ラレマス、所ガ「リブリゼンタティヴ・ダイエト」ト云フノハ國會ニ 於ケル代表者、即チ「リブリゼンタティヴ」デ、「アメリカ」デハ下 院ノコトヲ「ハウス・オブ・リブリゼンタティヴ」ト言ヒマス、「リ ブリゼンタティヴ・オブ・ダイエト」ト云フノハ明カニ廣イ意味ノモ ノデス、ソレカラ「イン・ザ・ダイエト」デスガ、日本デハ「バーラ</p>	<p>原本第1冊 81-129 頁。 *1 《是ハ私共…》部分欄外（83 頁） に、丸囲みされた《イキ》と書込 み。 *2 《英文ノ方カラ…》部分欄外（88 頁）に、丸囲みで《イキル》と書 込み。 *3 《直訳流ノ…》部分欄外（92 頁） に、丸囲みで《イキル》と書込み。 また、当該下線部前後に亀甲括弧 を消した跡あり。</p>

		<p>メント」トカ「<u> kongress</u>」トカ使ヒマスガ、是ハ大体「<u>ダイエト</u>」ト「<u>ドイツ</u>」流ニ用ヒテ居リマス、ソコデ思ヒ切ツテ日本流ニ意味ヲ分リ易ク「日本國民は正当に選挙された國會議員を通じて行動し」ト斯ウ致シタノデアリマス、[...]</p> <p>「諸國民との平和的協力の成果と、日本國全土にわたる自由の恵沢とを確保し」、是ハ<u>翻譯トスレハ</u>大分違ツテ居ルヤウデアリマスガ、政府ガ初メテ公ニシタ案文ニハ、「成果」ト云フ言葉ガ載ツテ居ル、此処ニ私ハ改正憲法ノ時事通信ガ書イタノヲ持ツテ來テ居リマスガ、此ノ中ニハ「平和的協力の成果」トナツテ居ル、ナゼ之ヲ生カシタカト云フト、此ノ憲法ノ性質ハ、一ツハ諸國民トノ間ノ平和主義、國際的平和主義デアリ、國內のニハ自由主義デアル、「<u>デモクラシー</u>」ノ意味デモ同ジコトデス、此ノ二ツガ特徴デアルカラ、「諸國民との平和的協力の成果」、此ノ「成果」ト云フ言葉ヲドウシテモ生カシタイト思フノハ、成果ト恵沢トノ二ツヲ確保スル、「成果」ト云フコトガナイト、唯「協力」ダケデアリカス、[...]</p> <p>[...]「國會議員を通じて行動」スルモノデアルト云フコトガ此処デハ非常ニ大切デアル、政府ノ行動デ戦争ノ惨禍ガ將來發生シナイコトヲ決定シテ、「ここに主權が國民に存することを宣言」スル、ドウシテ「主權が國民に存する」ト思切ツテ訳シタカト云フト、英文ノ方デハ可ナリ國民ノ意思ノ主權性ト云フモノガ書イテアリマス、是ハ議會デモ、社会党、共産党方面カラ、主權論ガハツキリシナイ、國民主權ト云フコトガハツキリ出テ居ラヌデヤナイカト云フ主張ガアツタ、御尤モデ、此ノ場合ニ「國民の総意」ト云フノト、唯國民ノ多数決ト云フ意味ニ取ラレルカラ、思切ツテ「主權が國民に存する」、是ハ社会党、共産党ハ絶エズ主張ヲシテ、非常ニ賛成シテ居ル、我々ハ斯ウ云フ問題ニ付テハ全國民ガ一致シテ支持シテ貰ヒタイ、唯人民主權ト云フ言葉ヲ避ケタノハ、人民ト云フト、共産党ナドノ人民ト云フノハ、支配階級ニ對スル人民、單ニ天皇ニ對スル一般國民ノ意味デナクテ、人民戦線ナント云フ言葉ハ、「ガヴァメント」、「ルーラー」ニ對シテ、「ザ・ルールド」、支配サレタ人々ト云フ意味ガ含マレルカラ、人民ヲ避ケテ、天皇ヲ含シタ國民全体ニ主權ガ存スル、之ヲハツキリ此処デ述ベタ方ガ宜カラウ、「主權が國民に存することを宣言」スル、<u>〔斯ウスレハ〕</u>「<u>聯合國ナドモ相当ニ納得シハシナイカ</u>」、政府モ國民主權ハ認メテ居ル、國家主權ト國民主權ハ實質ニ於テサウ違ヒハナイ</p> <p>ソレカラ、「この憲法を確定する」、實ハ何故「<u>制定</u>」スルト云フ言葉ヲ用ヒナイカト云フト、政府ノ意見モ質シテミタガ、「<u>制定</u>」ト云フト新タナ憲法ヲ作ルコトニナル、ソコデ現行憲法第七十三條ノ改正規定ニ依ツテ出タモノデアルカラ「確定する」トシテ、其ノ苦心ガアルカラ之ヲ生カシタ、併シ英文ノ方デ見ルト「<u>ドゥ・オーデン・エンド・エスタブリッシュ</u>」トナツテ居ル、是ハ非常ニ意味ガ強い、[...]</p>	<p>*4 《翻譯ト…》部分欄外 (103 頁) に丸囲みで《イキル》と書込み。</p> <p>*5 《訳シ》部分 (121 頁) には英訳時のものと思われる鉛筆の二重訂正線と、欄外に《用ヒ》との書込みがある。</p> <p>*6 《英文ノ方デハ》部分欄外 (121 頁) に《イキル》と書込み。</p> <p>*7 《<u>削除2</u>》(斯ウスレハ…)部分 (126 頁) の書込みは消しゴムで消した跡があり、指示書きは見られないが、英訳速記録では削除されている。前掲注 (86) 15 コマ目参照。</p>
5	々	<p>○森戸委員 議事進行ノコトデアリマスガ、大体各党ノ修正ノ根本ノ問題ヲ御話載イテ、詳シイコトハ其ノ箇所其ノ箇所デ御説明ニナツテ載ク方ガ議事ノ進行上宜イノヂヤナイカ、ソレデ今ノ御話ハ大變結構デアリマスケレドモ、斯ウ云フ方針デ、例ヘバ大体誤譯ヲ改メ、文章ヲ直スト云フ所デ前文ヲ改メタト云フヤウナ方針ヲ御説明願ツテ行ツテ載イタ方ガ少シ早く進ムノヂヤナイカト思ヒマス</p>	<p>原本第1冊 150-152 頁。</p>
6	々	<p>○芦田委員長 一寸申殘シマシタ、第二十二條第二項ノ終ヒ所ニ「法律は、個人の權威と両性の本質的」云々ト云フ文字ガアリマスガ、「個人の權威」ト云フノハドウモ少シ譯語トシテ——官廳ノ「オー</p>	<p>原本第1冊 173-174 頁。</p>

		ソリテイ」ト云フノハ宜イケレドモ—— […]」	
7	第 2 回	○笠井委員 私ハマダ刷り物が御度シシデアリマセヌカラ、一寸説明サセテ戴キマス、「 <u>是ハ聞イテ見マスト、相当英文ト云フモノガ重要ナ部分トシテ残ルト思ヒマス、「マツカーサー」ノ方デモ、此ノ前文ニハ相当筆ヲ下シテ居ルト云フコトヲ聞イテ居リマス、ソコデ]</u> 私ノ試案ヲ申上ゲテ見マスト、 […]」	原本第 1 冊 347-349 頁。 *【削除 3】《是ハ聞イテ…》部分欄外（348 頁）に《「 」トル》と書込み。
8	〃	○鈴木（義）委員 我ガ党デハ、余リダラダラシタ消極的ナ文章ダカラ、出来ルダケ雄渾ナ、簡潔ナモノニ直シタイト云フ希望ヲ持ツテ居ルノデス、サウスルト、是ハ英文ノソレトハ無関係ニヤルベキコトデアル、サウ云フコトガ許サレルカドウカト云フコトヲ先ヅ決メナケレバナラス、ソレカラヤハリ英文ト云フモノハ事実上無視出来ナイト云フナラバ、 […]」	原本第 1 冊 356-357 頁。 *《英文ノ…》部分欄外（356 頁）に《イキ》と書込み。
9	〃	○北（昀）委員 […]」此ノ前文ノ日本文ハ出来ガ悪イケレドモ、英文ノ相当ノ出来アルカラ、成ベク日本人ノ耳ニ親シミ易イヤウナ言葉ニ変ヘテ、皆サンガ御相談ノ結果、共同提案トシテ承認シテ戴クト云フコトニシタラドウカト考ヘテ居リマス	原本第 1 冊 358-364 頁。
10	〃	○笠井委員 「 <u>併シ事実ニ於テハ、既ニ「マツカーサー」ノ方デ筆ヲイレ、練ツタモノデスカラ、之ヲ無視スルコトハ出来ナイト云フコトガ最近段々分ツテ参リマシタガ]</u> 」、私ハ北君ノ説ニ賛成ヲ致シマス、 <u>原文ハ相当ニ力ヲ入レテ作ツタ文章デスカラ、日本人ノ性格ヲ入レタ文章ニ変ヘルコトハ至難デハナイト思ヒマス、今仰シヤルヤウニ、成程之ヲ読シテ見ルト、如何ニモダラダラシテ冗漫デスガ、是ハ用語ヲ変ヘレバ出来ルト思ヒマスカラ……</u>	原本第 1 冊 364-367 頁。 *1【削除 4】《併シ…》部分欄外（364 頁）に《「 」トル》と書込み。 *2 ママ部分（365 頁）は、活字版では《英文》と翻刻されている。
11	〃	○森戸委員 私ノ一寸印象ヲ申シマス、前文ノ改メ方が如何ニモ英文ヲ本文トシテ、是ノ誤訳ヲ詳シクスル、改メル、正誤スル、斯ウ云フヤウナ態度デ今ノ案ハ進マレテ居ルヤウデアル、是ハドウモ一寸政府ノ言ツテ居ル所トモ少シ違フシ、又我々トシテハサウ云フ態度デ行クコトハ必要ナイゾヂヤナイカ、唯併シ今日ノ事情デハ、或ハ我々ガ勝手ニ作ルト云フコトハ出来ナイケレドモ、併シサウ原文ノ文字通りニ、斯ウ云フ文字ガアルカラ、斯ウ云フ文字ニ直サナケレバナラスト云フヤウナ態度デハイカヌゾヂヤナイカ、サウナルトモト徹底的の二、共産党ノ人々ノヤウナ、此ノ草案ハ本文ハ寧ろ英文デアル、其ノ通りニ直セ、斯ウ云フヤウナ主張ヲ実ハ自由党進歩党ノ方が取ラレルノカ、 […]」併シ前文ガサウ我々ノ勝手ニ變ラナイトスレバ、一々ノ文字ノ穿鑿デナク、其ノ意味ヲ捉ヘテ、日本的ナモノニ直シテ行クト云フコトモ一ツ考ヘラレルコトデハナカラウカト思フ、 <u>此ノ前文ハ英語トシテハ私ハ非常ニ能ク出来テ居ルト思フ、中々莊重ナ文章デアルガ、併シ英文ト日本文トハ文章ノ構造ガ違フノデ、日本文ニ譯シマス</u> ト、非常ニ力ノナイダラダラシタモノニナル、或ハ原文ヲ尊重シナガラ、モウ少シ何ト言ヒマスカ、自由ト言フカ、意味ヲ取ツテ、文字ニ囚ハレナイヤウナ方法モ考ヘラレルゾヂヤナイカ、サウ云フコトニスレバ、多少兩方ノ考ヘ方モ一致スルノデアツテ、英文ニ斯ウアルカラ斯ウシナケレバナラスト云フヤウナ考ヘカラハ、寧ろ脱却スル譯ニハ行カヌガ、ソレニ拘泥シナイヤウニシタラドウデアラウカ、斯ウ云フヤウナ一般的な感シヲ持ツテ居リマス	原本第 1 冊 367-377 頁。 *1 《如何ニモ…》部分欄外（368 頁）に《イキル》と書込み。 *2 ママ部分（370 頁・376 頁）は、活字版ではいずれも《英文》と翻刻されている。
12	〃	○芦田委員長 森戸君ノ御意見モ、私モ個人トシテハ、サウ云フ風ニ簡潔ニ日本人ニ本當ニビント來ルヤウニシタイト思フケレドモ、併シ之ヲ日本人ノ手デ、而モ進駐軍本部ノ承諾ヲ得ラレルヤウナ思想ノ内容ヲ持ツタモノヲ書クト云フコトニナルト、中々三日ヤ一週間デハ出	原本第 1 冊 394-396 頁。 *《日本人ニ…》への傍線部分（394 頁）に《イキ》と書込み。

16	〃	○笠井委員 私ハ決シテ英文ガ原文デアルト云フコトヲ言フ譯デアナイ、又英文ヲ主ニシナケレバナラヌト云フコトヲ言フ譯デモナイ、唯將來此ノ憲法ヲ後世ノ人が讀シテドウ思フカ、自分等ノ時代ノ文章体カラモ合ハズ、後世ニ對シテモ如何ニモダラダラシタモノヂヤナイカト思フ、此ノ參考トシテハ英文ノ斯ウ云フモノガアル、ソレヲ見レバ非常ニ「デフイニファイ」シタ、非常ニ「パーフェクト」ナモノガ或ル程度出來テ居ルヂヤナイカ、ナゼサウ云ウ風ニヤラナクツタカト云フ批判ヲ受ケルコトニナリハシナイカト思ヒマス、後世に「アッピール」シナイモノヲ殘スト云フコトハ恥辱デアルト思フ、是ダケノモノヲ見テ、森戸、北、鈴木三氏カラ言ハレタヤウニ、 <u>成程英文ニ書イテアル、併シ同ジリガアルカト云フト、失禮ダケレドモ我々ノ考ヘカラ見ルト、日本文ト云フモノハ力ヲ與ヘナイ、況ンヤ憲法ナルモノハ不磨ノ大典デナケレバナラス、[...] 例ヘバ「セークレッド」ト云フノハ非常ニ強イ字デス、ソレヲ「崇高」ト譯セバ、「ノーブル」トカ「サブライム」トカハ表ハシマスガ、「セークレッド」ノ意味ハ表ハシマセス、神聖ナル信賴ト云フヤウナコトモ言ツテ居ルノデアリマスガ、原文ノ意味ヲソコニ持ツテ行クコトハ悪いコトデハナイト思フ、サウ云フ意味ニ於キマシテ、我々ハ日本人トシテハ方カラ讀シテ、衡イテ見テ、是ナラバ何レノ階級ノ人が見テモ、英文カラ來タモノデナイト云フ風ニシテ戴キタイト云フノガ私ノ念願デス</u>	原本第1冊 430-440 頁。
17	〃	○北(略)委員 林君、其ノ事情ヲ打チマケルト穩カデナイカラ、色々國際情勢ニ鑑ミテ、國民主權ト云フ言葉ヲハツキリ出サスト工合悪いノゾ、各派モサウ云フ考ヘヲ持ツテ居ルト云フヤウニ御報告ラシテ、御諒解ヲ求メル譯ニイカヌデセウカ	原本第1冊 466-468 頁。
18	〃	○森戸委員 成タケ翻譯ノ印象ヲ取除ケテ、意味ヲ取りナガラ日本語テ書クト云フコトニ修正シタ方が宜イ、其ノ方が滑カン行クト思フ、[...]	原本第1冊 550-551 頁。
19	〃	○犬養委員 英文ノ粗ヒヲ割ニ擱シテ居ルヤウニ思フノデスガ、唯オ互ニ心得テ置カナケレバナラスノハ、此處ダケ非常ニ格ノ高い漢語ヲ使ツテ、後ハ何トカニ依ツテナサレトアル、其ノ調和ヲ旨キヤレバ、語呂トシテハ非常ニ宜イト思ヒマス	原本第1冊 553 頁。
20	〃	○高橋(泰)委員長代理 是ハ原文ハ「オール・ネーションズ」ト言ツテ居ルノデスカ	原本第1冊 561 頁。
21	〃	○犬養委員 是ハ私が申上ケルノハ筋ガ変カモ知レマセスガ、是ハ関係方面ト屢々折衝「ガアリマシテ、強イ要求ガアツタノデアリマス、英語ノ「ドラフト」ト、日本語ノ「ドラフト」ト違フト云フコトガ非常ニ問題ニナツタノデス、 <u>実ハ英語ヲ直訳スルト斯ウナルノデス、元ノハ間違ヒデアツタノデス、ソレデ</u> 」數日前ソレニ決定シタノデス、御參考マデニ……	原本第1冊 695-697 頁。 * 【削除6】《ガアリ…》部分欄外（696 頁）に丸囲みで《「」トル》と書込み。また、削除を受けて、同頁欄外に《ノ結果》と補筆の書込み。
22	〃	○笠井委員 サウデス、「狹量」トカ「頑迷」トカ云フ風ナ字ガ字ヲニ翻譯トシテ出テ居リマスガ、「イントレランス」デスカラ、モツト強イ字ヲ使ヒタイ訳デスガ、ドナタカ御意見ハゴザイマセデセウカ	原本第1冊 763-764 頁。
23	〃	○大島(多)委員 此ノ原語ノ「オブレーション」ト「イントレランス」ト云フノガ、大体は對句ニナルモノヂヤナイデスカ、ソレヲ日本語ニ全ク對語ニナルモノヲ揃ヘヨウトスル所ニ無理ガアル、「オブレーション」ト「イントレランス」ト云フノハ、上ノ方ノ「ティラーニー」ト「スレーヴァリー」ト、斯ウ云フヤウナ立派ナ對照的ナ言葉デナク、 <u>大体原語ガ悪いノデス</u>	原本第1冊 777-778 頁。 * 下線部は英訳では表現が和らげられている。
24	〃	○江藤委員 原語ハ分カリマセスケレドモ——[...]	原本第1冊 778 頁。

25	々	○森戸委員 是ハ元御譯シニナツタ原案ノ方ハ……	原本第1冊 830 頁。
26	々	○芦田委員長 英文ノ方ハ「責務 ^{デューティ} アルト信ズル」ト言フ後ヘ直グニ「日本國民ハ」ト一行デ續イテ居ル、ソレヲ日本語ノ翻譯デハニツニ切ツテアル	原本第1冊 892-893 頁。
27	々	○「○芦田委員長 今日「ウィリアムス」ニ聴カウト思ツテ持ツテ行ツタノデスガ、忘レテシマツタ」	原本第1冊 947-949 頁。 *【削除7】947 頁欄外に丸囲みで《トル》と書込み。
28	第3回	○廿日出委員 […]又之ヲ書キ替ヘテ色々トヤツテ見マシテモ、何ダカ非常ニ英文ノ方ハ「ザ・フルーツ」「ザ・プレッシングス」ト実ニ面白ク出テ居ルノデスガ……	原本第2冊 37-40 頁。 *《英文》部分(40 頁)に《イキ》と書込み。
29	々	○森戸委員 ソレハ掛カル、掛カラスヨリモ、寧ロ日本語トシテドラガ妥当デアラウカト云フ問題デアツテ、疑問ガアル場合ニハ、僕ハ原文ハ参考トシナガラ、文章トシテハ日本デ割合ニ体ヲナスヤウニスルコトが宜イノデハナイカ、根本ノ精神ガ違フト困リマスケレドモ、サウ云フ精神デヤツタ方が宜イノデハナイカ、私ノ前ニ言ツタ時ノ建前カラ言フト、コチラニヤルト非常ニ原文カラ意味ガ違フト云フノデハ、是ハ問題ガ違ヒマスケレドモ、略略似タモノデアレバ、[…]	原本第2冊 42-52 頁。
30	々	○笠井委員 日本文ガ「テキスト」ニナル訳デスカラ、將來違ツタ場合ニハ英文ヲ直スヤウニシテ置カナケレバナリマセスカラ……	原本第2冊 86-87 頁。
31	々	○芦田委員長 英文ニ協力ノ成果ト云フ字ガアルノデスガ、原案デハ成果ト云フ字ガ抜イテアツタ、ダカラ「協和による成果」ト入レタ方が英文ノ趣旨ニモ合フ訳デス	原本第2冊 89 頁。
32	々	○芦田委員長 一寸森戸君ニ伺ヒマシガ、サウスルトアナヲノ言ハレル英文ノ趣旨ハ、我々ト我々ノ子孫ノ爲ニ平和ニ依ル成果ト自由ノ齋ラス惠澤トラ確保シ、戦争ノ慘禍ヲ繰返サナイコトヲ決意シ、ソコデ正當ナル代表者ヲ通ジテ主權ガ國民ニ在ルコトヲ宣言シ憲法ヲ制定ス、斯ウ云フ意味デスカ	原本第2冊 107-108 頁。
33	々	○佐藤(達)政府委員 私共ノ氣持ヲ申上ゲマスト、英文ノコトハ勿論詳シクゴザイマセヌガ、英文ヲ見ナガラノ日本文ヲ書キ下シマス時ノ氣持ハ、[…]	原本第2冊 112-113 頁。
34	々	○北(吟)委員 […]「ジャパニーズ・ピープル」ト云フノハ形容のナモノデアル、「フー・アクト」ト直ス外ハナイ、結局上ニ掛ルノデアツテ、日本國民ノ性格ヲ規定シタモノデアル、下ニ何ガアラウト關係ナイコトデアル、法制局ニ於テ原案ガ單獨ニ出サレタ云フナラ、別ニナリマスガ、多少英文ト並行のニ拵ヘテ之ヲ参照シタモノダト、是ハ全然誤解ノ因デアルカラ、記録ニ留メテ置ク位ニ主張シマス	原本第2冊 119-124 頁。
35	々	○笠井委員 只今ノ問題デスガ、ドウシテモ英文ヲ度外視スルコトガ出来ナイノデスカラ、今佐藤君ノ御話ヲ聽イテモ、之ヲ骨子ニシテコチラヲ作ツタト云フコトデス、[…]	原本第2冊 131-132 頁。
36	々	○北(吟)委員 […]政府ト云フモノハ本來ドンナモノデアルカト云フ説明ガ「そもそも」カラ來テ居ルノダカラ、ヤハリ初メノ「政府」ハ、政府ナルモノハ國民ノ崇高ナ信託ニ依ルモノデアツテ、抑御政府ノ持ツテ居ル「オーソリテイ」ハ國民ニ由來スル、之ヲ笠井君ノ言ハレルヤウニ「發現す」デモ「由來す」デモ宜イ、「發現す」ノ方が原語ニ近イデセウ、其ノ方が尚ホ宜イカモ知レヌガ、[…]	原本第2冊 159-164 頁。 * ママ部分(164 頁)は、活字版では《英文》と翻刻されている。
37	々	○笠井委員 是ハドウデゴザイマセウ、本日此處デ最後ノ決定ヲシテ裁カズニ、「ガ ^ガ ヴァーメント」即チ「政府」ト云フ二字ヲ使ツテアリマスガ、本當ノ「ガヴァーメント」ノ「コンセプション」トカ「ミーニング」、英文ノ起草者ノ考ヘハ何處ニアルカ、之ヲ突止メル必要	原本第2冊 186-187 頁。

		ガアルダラウト思ヒマスカラ、是ハ後ニ決定シテ戴キタイト思ヒマス	
38	々	○北（略）委員 私モ英文デ笠井君ノ如ク之ヲズットーツノ文章ノ中ニ入レルト「政府」トシナケレバナラヌト云フ主張ハ飽クマデ固執スルガ、[…]	原本第2冊189頁。
39	々	○芦田委員長 笠井君、「 <u>アメリカ</u> 」人デモ日本ノ政府ト云フ字ガドウ云フコトヲ意味スルカト云ツタヤウナ細カイ所ハ中々分ラナイ、サウ云フ一種ノ言葉ノ持つ色合マデ分ルヤウナ人ハ少イノダカラ、ヤハリ斯ウ云フ所ハ日本人デ相談シテ考ヘルヨリ仕様ガナイノヂヤナイデセウカ	原本第2冊192-194頁。
40	々	○芦田委員長 是ハ「 <u>ルーズヴェルト</u> 」ノ四ツノ自由ト云フコトヲ其ノ儘此處ニ書クヤウナ氣持ナンデセウネ、其ノ中ニ恐怖ト欲乏カラ免ガレ、ト云フコトハ、四ツノ自由ノ文字ソツクリ其ノ儘持ツテ来タト思フ、サウ云フ四ツノ自由ヲ全世界ノ人間ガ享有スベキダト云フノデ……	原本第2冊419-422頁。
41	々	○芦田委員長 初メノ方ハ日本ト云フ國ヲ頭ニ置イテ考ヘル時ニ、日本ノ今日アルノハ、主トシテ專制ト隷従、圧迫ト偏狹、是ガ日本ヲ今日ニ至ラシメテ居ル、先ヅ以テソレヲ叩キノメシテカラ行ケ、斯ウ云フ氣持ダラウト思フ、是ハ私ノ想像デスヨ、其ノ後ヘ持ツテ来テ四ツノ自由ト云フ思想ヲ書イタ、私ハ英文ヲ書イタ人ノ頭ノ傾向ハサウ云フコトダツタト思フノデス、ソレダカラ初メノ偏狹ト圧迫トカ云フコトハ、最近ノ日本ニ於ケル最大ノ缺陷ハ何処ニアルカ、斯ウ云フコトヲ頭ニ置イテ書イタンダカラ、貧乏ノ方ハドウセ戦争ニ負ケタンダカラ、オ前達ガ我々ヨリ低イ暮シヲヤルト云フコトハ当前ダト云フノデセウ、唯森戸君ノ意見トハ別ノ話ダガ、書イタ人ノ頭ハサウ云フコトダラウト思フ	原本第2冊423-429頁。
42	々	○芦田委員長 ソレハ私ガ今申上ゲタ、僕ノ推測ニ過ギナイカモ知レヌガ、サウ云フ頭デ書イテ居ルンダカラ……	原本第2冊434-435頁。
43	々	○森戸委員 ダカラ我々ガ審議スル限りハ、之ヲ是正シテ宜インデハナイカ、是正シテ惡イト聯合國カ言ツテ来ル心配ハ斷シテナイト思フノデス	原本第2冊435-436頁。
44	々	○森戸委員 […]日本ノ実情ニ鑑ミテモ、外ノ國ノ事情ニ鑑ミテモ、我々ガ憲法ヲ議スルノニ、恐ラク占領軍モ日本ノ事情ハ能ク知ツテ居リマスシ、サウ云フ所デサウ云フ字ガ差シ挟マレタカラト云ツテ、別ニ之ヲ怪シカラヌト言フ筈モナイダラウト思フ、サウシテ國民ノ要望ガサウデアルナラバ、強ヒテ之ヲイケナイト言ハレル理由ガ僕ニハドウモ能ク理解出来ナイノデス	原本第2冊439-443頁。
45	々	○北（略）委員 […]是ガ本當ニ僕等ガ戰敗國ニアラザル一人前ノ國トシテノ希望ナラ、或ハ斯ウ云フ所ヘ人種的偏見ヲ出シタリ、資源ノ公平ナル分配、領土ノ公平ナル分割ト云フ、モツト大キナ所ヲ狙ツテ居リマスガ、サウ云フコトノ言ヘル時代ヂヤナイ、日本ガ非常ニ資本主義的デアツテ、ソレガ爲ニ皆ガ窮乏シテ居ルナラバ別デアルガ、資本主義ノ弊害ガ今日日本全面ニ亘ツテ居ルノヂヤナクテ、戦争ニ負ケテ、之ノ回復ニ二十年掛カルカ三十年掛カルカ分ラナイノニ、資本主義的社會ヲ是正スルト云フヤウナ、日本ダケ特別ニ資本主義的弊害ノ餘計ニ現ハレテ居ルヤウナ文句ヲ此處ニ用ヒルト云フコトハ、私ハドウモ承服シ兼ねル、モツト本當ニ言フナラバ、 <u>資源ノ公平ナル分配、領土ノ公平ナル分割、人種的偏見ノ打破、移民ノ自由ト云フモノヲ入レテモ宜イ、ソレガ出来ナイカラヤハリ「ルーズヴェルト」主義ノ比較的安價ナ、持テ爾國ノ言フ自由主義、平和主義ニ甘ンゼザルヲ得ナ</u>	原本第2冊446-451頁。

		イ、此ノ憲法全体ニサウデス	
46	〃	○芦田委員長 〔…〕餘り廣く話シテ宜イノカ惡イノカマダ分リマセヌガ、前文ニ於テ既ニ主權ガ國民ニアルトハツキリ書イタノデアルカラ、第一章ノ條文ニ於テモ、主權ガ國民ニアルヤウナ意味ヲ現シテハドウカト云フノガ、何時モノ筋ノ意向ダサウデス、随テ第一章ノ條項ニソレヲ入レルコトガ適當デアルカモ知レナイガ、サウ云フ場合ニ、本當ニドウ云フ形デ之ヲ入レルコトガ宜イカト云フコトヲ法制局アタリデモ考ヘテ貰フ必要モアルシ、又其ノ筋ノ意向ト云フコトガ果シテドノ程度マデ絶對確實ナモノカト云フコトモ、モウ一度當ル必要ガアルト思ヒマスカラ、第一條ダケハ留保シテ置イテ審議ヲ進メタラドウカト思ヒマス	原本第2冊 483-498 頁。 * ママ部分 (497 頁) の《度》は《應》の字句修正があるが、意味が通じないためそのままとした。
47	〃	○犬養委員 〔…〕第一條「天皇は、日本國の象徴であり日本國民統合の象徴であつて、この地位は、國の主權を有する日本國民の総意に基く。」 ⁶ は大體英文ノ線ニ沿ツテ居ルノデハナイカト思ヒマスガ、月曜日マデニツ御教示ヲ願ヒマス	原本第2冊 536-539 頁。
48	〃	○鈴木 (義) 委員 未確定案デスガ、法制審議會ノ原案ニナツテ作ツテ居ルノハ、總理大臣ト貴衆兩院、是カラハ參議院デスガ、其ノ議長、ソレカラ最高裁判所判事二人、將來宮内大臣ガアルカナイカ、ソレニ相当スルモノ、ソレト同數ノ皇族、ソレノ議決ト云フコトニナツテ居リマス、無論委員ノ中ニハ國會ノ議ニ附スベキデアルト云フ御主張ヲナサツテ居ル大學教授モアリマス、併シ是ハ斯ウ云フ會ダカラ申上ゲテ宜カラウト思ヒマスガ、外部ヘ發表シテハ困リマス、極秘ト云フ訳デス	原本第2冊 557-560 頁。
49	〃	○犬養委員 林サンニ教ヘラ乞フ譯デスガ、一國民トシテ陛下ダケガ政治ニ關スル權能ヲ有シナイ、日本語デ言フト、日本國民ラシイ眞情ノ溢レタサウ云フ御氣持ハ分ルノデスガ、段々由ツテ來ル英文ノ方ヲ見ルト、「パワース・リレーテッド・トゥ・ガヴァーメント」ト云フヤウナカハナイ、誰モサウ云フモノヲ持ツトハオ互ヒ豫想シナイ、〔…〕	原本第2冊 591-593 頁。
50	〃	○犬養委員 ヨクモ陛下ガ解散シタナト云フ氣持ニハナラスト思フ	原本第2冊 645 頁。 * 傍線部分に《イキ》と書込み。
51	〃	○鈴木 (義) 委員 併シ、只今解散ノ詔勅ガ下リマシタト云フ、ソレガ嘘ナンダカラー豫ネテ用意シテ置イタモノヲ出シテ、陛下ガ實際ニ携ツテ居ラレルヤウナ擬制ヲ強ヒルダケデスカラネ	原本第2冊 645-646 頁。 * 2箇所傍線部分 (646 頁) に《イキ》と書込み。
52	〃	○芦田委員長 〔…〕民主主義政治ガ確立スレバ危険ノナイヤウナ運営ハ出來ルノダカラ、此ノ程度ノ儀禮的ノ權能ヲ天皇ニ認メル〔ト云フコトハ、國內ニ於ケル一部ノ反動ヲ防グ効用モアリ、今新聞ニ現ハレテ居ル議論、議會ニ現ハレテ居ル勢力ガ必ズシモ日本ノ國內ノ思想ヲ性格ニ現ハシテ居ルモノトハ考ヘラレナイノデアツテ、默ソテ引込シテ居ル勢力ト云フモノガ左右共ニ相当アルニ違ヒナイ、サウ云フモノニ對スル、新シイ憲法ヲ發布シタ時ニ受ケル印象、サウ云フコトモヤハリ考ヘテ置カナケレバナラスノデ、却テ斯ウ云フ儀禮的ナモノヲ殘シテ置イタガ宜イ部分ト、之ヲ殘スコトガ非常ニ惡ク響ク部分トアルダラウト思フノデス、ケレドモ今日ノ時勢ニ於テハ〕先ヅ此ノ程度ノモノヲ殘シテ置クト云フコトガ、双方ノ妥協点トシテハ丁度適當ナモノデアツテ、我々ノ考ヘカラ言フト、此ノ程度ノモノデ行キタイト、斯ウ云フ風ニ思フノデス	原本第2冊 657-664 頁。 * 【削除8】《ト云フ…》部分欄外 (661 頁) に丸囲みで《トル》と書込み。
53	第4回	○西尾委員 政府委員ニ御尋ネシタイノデスガ、例ヘバ宣言スルト云フ案ハ、〔G・H・Q〕ノ方ノ考ヘバドウナンデセウ、少シ難シイノデ	原本第3冊 86-87 頁。 * 傍線部欄外 (87 頁) に欄外に

		ハナイカト云フ感ジガスルデサガ……	《「イキ」》と書込み。
54	〃	○西尾委員 私ノ考ヘマスコトハ、宣言スルト云フコトニナリマス ト、日本國民ニモ宣言スルトニナル、世界ニモ宣言スルトニナル、 一體此ノ憲法ハ日本ノ國民ノ行クベキ方向ヲ決定スルノガ主タル目 のナド、ソレガ憲法ノ中デ、而モ敗戦國ノ日本ガ今直グ世界ニ向ツ テ宣言スルト云フヤウナ形ノ行キ方ヲ、 <u>「G・H・Q」ノ方デドウ云フ ヤウニ取ルカト云フコトヲ私ハ氣ニシテ居ルノデス</u>	原本第3冊 91-93 頁。 * 傍線部欄外 (93 頁) に《イキル》と書込み。
55	〃	○芦田委員長 「〔第二項ノ書き方ハ國民多数ハ決シテ喜ンデ之ヲ読 ムトハ私ハ思ハナイ、〕」ソレナラバー應其ノ意向ヲハツキリシテ、支 障ガアツタ時ニハ已ムヲ得ナイ、不可抗力ナラバ其ノ時其ノ時デ考ヘ ル、斯ウ云フコトデドウデセウカ	原本第3冊 98-99 頁。 * 【削除9】《第二項・》部分の欄外 (98 頁) に丸囲みで《「」ト ル》と書込み。
56	〃	○西尾委員 サウナツタ時ニハ已ムヲ得ナイケレドモ、國民ニ満足サ セヨウト思ツテヤツタコトガ、支障ガ起ツタ結果トシテ餘計ニ満足ナ 感ジヲ與ヘルト云フコトハ、我々トシテハ考慮スベキ餘地ガアルと思 フ	原本第3冊 100-101 頁。 * 傍線部欄外 (100 頁) に《イキ ル》と書込み。
57	〃	○吉田 (安) 委員 サウスルト今ノ御話デハ、順序トシテハ憲法委員 會ニ上セマス前ニ <u>「G・H・Q」ト……</u>	原本第3冊 103-104 頁。 * 傍線部欄外 (104 頁) に《イキ ル》と書込み。
58	〃	○芦田委員長 委員會ノ成案ハ發表シテハ交渉ノ時ニ工合ガ悪いデ セウ、サウ云フモノヲ發表スル前ニ相談シロト云フコトグラウト思フ ンダ	原本第3冊 108 頁。 * 傍線部分欄外 (同頁) に《イキ ル》と書込み。
59	〃	○芦田委員長 是ハ斯ウ云フコトデセウ、「アメリカ」流ニ言ヘバ、 「ソーシャル・セキュリティ」ト言フコトヲーツノ制度トシテヤツ テ居ル、ソレヲ日本デハ社会保障ト譯シテ居ルノデス、所ガ社會保障 デハドウモフリニクイト云フノデ、煎ジ詰メレバ生活ノ保障ト斯ウ入 レラレタノデアツテ、是ハ私自身ノ翻譯アルガ、私ガ翻譯スレバ「社 會福祉、社會保障及ビ公衆衛生ノ向上及ビ増進ト斯ウヤツタト思フ ノデス、[…]	原本第3冊 641-643 頁。 * 傍線部欄外 (643 頁) に《イキ ル》と書込み。
60	〃	○北 (時) 委員 十二條ヲヨク讀シテ御覽ナサイ、追求ト云フノハ幸 福ダケニ付クノデ、原文ヲ忠實ニ譯セバ、生命權、自由權及ビ幸福追 求權デス、國民ノ生命權、自由權及ビ幸福追求權ニ付テハ——アナタ 方ノ生存ヲ追求スル、望ムト云フ權利位ニ思ハレルカモ知レナイガ、 是ハ本當ハ幸福追求ダケデスヨ、文字通りニ譯スレバ、國民ノ生命權、 自由權及ビ幸福追求權ハ立法其ノ他國政ノ上デ最大ノ尊重ヲ必要ト スル、生存權ト云フモノハ十分ニ入ツテ居ル、「ゼア・ライト・トゥ・ ライフ」デスカラ……	原本第3冊 739-741 頁。 * 傍線部欄外 (739 頁) に《イキ ル》と書込み。
61	第5回	○原 (夫) 委員 […] ヤハリ情操教育ト云フコトニ付テモ機關ガソ レダケ関與シテ宜シイカ、斯ウ云フコトニナルト、ソコハ紙一重ノ所 デハアルガ、大キナ変革期ニ於テ機關ガ関與シテハナラス、是ハ鉄則 ダト思フノデス、殊ニ聯合軍ノ立場カラ見レバ、此ノ点ハ極メテ重要 視シテ居ル点ダト思フノデス、[…]	原本第4冊 31-37 頁。 * 傍線部欄外 (37 頁) に《イキル》 と書込み。
62	〃	〔「○鈴木 (義) 委員 今一ツ念ノ爲ニ、交戦權ヲ先ニ持ツテ來テ、 戦争抛棄ヲ後ニ持ツテ來ルコトハ、立法技術的ニ如何デスカ	原本第4冊 524-525 頁。 * 【削除 10 の①】 524 頁欄外に丸 囲みで《「」トルコト》と書込み。
63	〃	○金森國務大臣 是ハ非常ニ「デリケート」ナ問題デアリマシテ、 サウ輕々シク言ヘナイコトデアリマスケレドモ、『第一項ハ「永久に これを抛棄する」ト云フ言葉ヲ用ヒマシテ可ナリ強ク出テ居リマス、 併シ第二項ノ方ハ永久ト云フ言葉ヲ使ヒマセヌデ、是ハ私自身ノ肚勘 定ダケカモ知レマセヌガ、將來國際聯合等トノ關係ニ於キマシテ、第	原本第4冊 525-529 頁。 * 【削除 10 の②】

		二項ノ戦力保持ナドト云フコトニ付キマシテハ色々考フベキ點ガ殘ツテ居ルノデハナイカ、斯ウ云フ氣ガ致シマシテ、ソコデ建前ヲ第一項ト第二項ニシテ、非常ニ永久性ノハツキリシテ居ル所ヲ第一項ニ持ツテ行ツタ、斯ウ云フ考ヘ方ニナツテ居リマス、ソレカラ御質疑ト直接關係ガアルカドウカ知りマセヌガ、サウ云フ考ヘデ案ヲ作ツタノデアリマス」]	*2 ママ部分 (529 頁) は、活字版では《ソレガ》と翻刻されている。
64	第 6 回	○鈴木 (義) 委員 「アメリカ」デハ今度ノ戦争デ虐待事件ガアツタカラ、殘虐ナ刑罰ガアルト思ツテ居ルノデセウ	原本第 5 冊 69 頁 * 《「アメリカ」…》部分に《イキ》、同頁欄外に《イキル》と書込み。
65	〃	○笠井委員 別ニゴザイマセヌケドモ、如何ニモ東洋人ハ殘虐ダト云フ風ナコトヲ彼等ハ思ツテ居ル、間違ツタ考ヘヲシテ居リマスカラ、ソナナ積リデ茲ニ入レタデハナイデセウカ	原本第 5 冊 71-72 頁。 * 《殘虐…》部分 (71 頁) に《イキ》、同頁欄外に《イキル》と書込み。
66	〃	○犬養委員 佐藤サンニ伺フノデスガ、是ハ關係方面ハ職能代表ト云フ觀念ヲドンナ風ニ見テ居ラレマスカ	原本第 5 冊 89 頁。 * 傍線部欄外 (同頁) に《イキル》と書込み。
67	〃	○佐藤 (達) 政府委員 私共ノ今日マデノ接觸ニ於キマシテハ、ソレハ困ルト云フコトナノデス	原本第 5 冊 90 頁。 * 傍線部欄外 (同頁) に《イキル》と書込み。
68	〃	○鈴木 (義) 委員 ソレハ私共モ關係方面ト折衝シタ時ニ、之ヲ話題ニ上セテ、餘リ賛成出来ナイ、ト云フノハ、少數代表ニナル、眞ノ全國民代表ト云フコトデアルナラバ、サウ云フ風ニシテヤレルナラバ賛成スル…	原本第 5 冊 90-91 頁。 * 傍線部欄外 (90 頁) に《イキル》と書込み。
69	〃	○鈴木 (義) 委員 エエ、併シ結果ニ於テ二百カソコラデ當選スルノガアツトデハ好マシクナイト言フノデス	原本第 5 冊 92 頁。 * 傍線部分欄外 (同頁) に《イキル》と書込み。
70	〃	○芦田委員長 ダカラ結論ダケ下セバ宜イト思フンダガ、結局職能代表ノ選舉ノヤリ方ハ、此ノ憲法ヲ作ツタ時ノ空氣デハ一寸難カシイノデ、寧ロ一院制度ノ方ニ采配ガ上ツテ居ツタノヲ、漸ク二院制度ニ直シテ茲ニ出シテ來タンダガ、ソレヲ職能代表ト云フ今ノヤウナ案デ行ツタナラバ、結局參議院ト云フモノノ成立ハ困難ニナルノデハナイカ、是ハ私限りノ感ジデスガ、サウ思フノデス	原本第 5 冊 115-117 頁。 * 《此ノ憲法…》部分 (115 頁) に《イキ》、同頁及び 116 頁欄外の 2 箇所に《イキル》と書込み。
71	〃	○犬養委員 今ノ案デ二點法制局ノ御意見ヲ承リタイ、一點ハ全國的ニ選ブトナルト、先刻鈴木サンノ心配シテ居ツタヤウナ、或ハ委員長ノ心配シテ居ツタヤウナ、産業組合關係ノ者ガ無制限ニ當選スル、サウ云フ心配ガアル、モウツツハ新聞ニ出テ居リマシヤウニ衆議院、參議院ガ推薦制度ヲ執ルト云フコトハ、關係方面デ法ノ置キ方トシテ通りマスカ	原本第 5 冊 126-128 頁。 * 傍線部分欄外 (128 頁) に《イキル》と書込み。
72	〃	○鈴木 (義) 委員 […]『ソレカラ今一ツ關係方面ガ恐ラク斯ウ言フ收益ヲ是認スルカト云フコトガ大問題ダト思ヒマス、現ニ是認シナイト解サルベキ聲明ミタヤウナモノヲ發シテ居ル。』我々トシテハ原則ハ多寡ノ問題ヨリハ、ヤハリ透明ナラシムルト云フコトガ大切ナコトデアル	原本第 5 冊 520-525 頁。 * 【削除 11】523 頁欄外に《「」トル》と書込み。
73	第 7 回	○廿日出委員 實ハモウ皆サンモ皆御希望デアツタ筈デアリマスガ、此ノ文章ガ全く醜詆のデアル、初メテ讀ンデ何處ヘドレガドウ付イテ居ルノカ分ラヌ、斯ウ云フヤウナ御話デアリマシモノデスカラ、成ルベク是ハ——勿論ドチカラガ原文ニシタ所デ、オ互ヒニ綜合シテ必ズ分ル所マデ行カナケレバナラス、是ハ一ツノ原則トシマシテ、ドチカラコト云フト、ソレヲモット一歩進メテ日本人ガ作ツタ文章ラシイモ	原本第 6 冊 79-82 頁。 *1 《此ノ文章…》部分欄外 (80 頁) に《イキ》と書込み。 *2 《勿論…》部分欄外 (81 頁) に《イキ》と書込み。 *3 《日本人…》部分 (81 頁) に《イ

		ノニ成ベク近付ケヨウ、斯ウ云フ努力ヲ前文ニ關スル限り拂ツテ差支ナイノデヤナイカ、隨テ私ハ、所謂憲法ノ各章各條ニ亘ツテノ其ノ言葉ノ使ヒ方ニ付キマシテハ、特定ノヤハリ一ツノ習慣ガアツテ、隨分困難ナ條文ニ出會スト思ヒマスケレドモ、前文ニ關スル限り相當思ヒ切ツテ、法律的ナ用語ヲ碎イテト申シマスガ、ソレト離レテ……	キ》と書込み。
74	〃	〔「〇犬養委員 是ハ一寸法制局ニ伺ヒマスガ、第九條ノ第一項ハ今一寸鈴木君ガ觸レラメシタガ、是ハ永久不動、第二項ハ多少ノ變動ガアルト云フ、何カ含ミガアルヤウニ、一寸此ノ間國務大臣ノ御發言ガアツタノデスガ、サウ云フ含ミガアリマスガ	原本第6冊 130-132 頁。 *【削除 12 の①】130 頁欄外に《「 トルコト》と書込み。
75	〃	〇佐藤（達）政府委員 正面カラサウ云フ含ミガアルト云フコトヲ申上ケルコトハ出來ナイト思ヒマスガ、唯氣持ヲ分リ易ク諒解シテ戴ケルヤウニ、金森國務大臣ハアア云フ言葉ヲ御使ヒニナツタノダラウト思ヒマス	原本第6冊 132-133 頁。 *【削除 12 の②】
76	〃	〇犬養委員 隨テ此ノ順序ハ無意味デナクテ、相當意味ガアル……	原本第6冊 133 頁。 *【削除 12 の③】
77	〃	〇佐藤（達）政府委員 意味ガアルト云フコトヲ申シタイ爲ニアア云フ表現ヲ使ハレト思ヒマス	原本第6冊 133-134 頁 *【削除 12 の④】
78	〃	〇犬養委員 是ハ一應論議ノ對象ニナル〕	原本第6冊 134 頁。 *【削除 12 の⑤】
79	〃	〔「〇吉田（安）委員 昨日デシタカ、金森國務大臣ガ一寸云ウテ居ラレタ永久ト云フコト、第一項ト第二項ノ何デスガ、今又法制局ノ佐藤サンカラノ御話、サウ云ツタコトヲ考ヘマスト、大分是ハ強サニ於テ第一項ト第二項——勿論第二項ハ何デスガ、含ミガアルヤウニ考ヘラレルノデスガ、サウスレバ是ハドウデセウカ、ヤハリ原文ノヤウニシテ置イタラ如何デセウカ〕	原本第6冊 144-146 頁。 *【削除 13】144 頁欄外に《「 トル》と書込み。
80	〃	〇芦田委員長 ソレデハ私モウツ説明シナカツタ理由ヲ申上ゲマス、〔「原文ノ儘ニ第二項ニ置イテ、サウシテ文句ヲ變ヘルト、關係筋デ誤解ヲ招クノデハナイカ、独立ノ條項トシテ置ク限りハ「これを保持してはならない」、「これを認めない」ト云フ風ニシナイト、 <u>ドウモ却テ修正スルコトガ毒蛇ニナルノダカラ、ソコデドウシテモ</u> 〕日本ハ國際平和ト云フコトヲ誠實ニ今望ンデ居ルノダ、ソレダカラ陸海軍ノ持テナイノダ、國ノ交戦權モ認めナイノダ、斯ウ云フ形容詞ヲ附ケテ「戦力を保持せず」ト言フコトノ方が、其ノ方面ノ交渉ノ時ニハ説明ガシ易イノデハナイカ、此ノ儘ニ置イテ此ノ第二項ノ英文ヲ書換ヘルト云フコトハ相當困難デヤナイカ、斯ウ云フ理由モアツテ、ソレデ之ヲ一定ノ平和機構ヲ熱望スルト云フ機構ノ中デ之ヲ解決シテ行ク、斯ウ云フ風ニ實ハ考ヘタノデス	原本第6冊 146-150 頁。 *【削除 14】147 頁欄外に《「 トル》と書込み。
81	〃	〇吉田（安）委員 私ハ委員長ノ修正案ハ最初カラ非常ニ賛成デス、鈴木委員ノ御説モアリマスガ、委員長ノ仰シヤルコトニ賛成シマス、〔併シ金森サンノ仰シヤツタコトニ一寸引掛リガアリマスガ、何カ將來第二項ノ方ハモウ少シドウニカナリハシナイカト云フ氣ガスルノデス	原本第6冊 156-158 頁。 *【削除 15 の①】157 頁欄外に《「 トル》と書込み。
82	〃	〇芦田委員長 併シソレハ憲法ノ書き方デ決マルノデハナクテ、今後ノ日本ノ民主化ノ程度、國際情勢デ決マルノダカラ、私ハ此處ニ「永久」トアルカラ、何カアルト云フヤウナコトハ、形ノ上ノ問題トシテハ非常ニ重要ダガ、實際問題トシテハサウ大シタ變リハナイト思フ〕	原本第6冊 158-160 頁。 *【削除 15 の②】
83	〃	〇芦田委員長 ダカラソレダケヲ獨立シテ、サウ云フ風ニ直スコトガ果シテ關係方面ト簡單ニ旨ク行クカドウカ	原本第6冊 169 頁。 * 傍線部分欄外（同頁）に《イキル》と書込み。

84	〃	○芦田委員長 併シ欲セズト云フコトハ、「ウィル・ネヴァ・ビー・オーソライズド」ト云フ言葉ノ翻譯トシテハ、是ハ原文ハ變リマセヌトハ言ヘタインヂヤナイデスカ、相當強イ言葉デスヨ、決シテ許可ハシナイ、斯ウ書イテアル	原本第6冊 171-173 頁。 *1 傍線部分欄外 (172 頁) に《イキ》と書込み。 *2 ママ部分は活字版では《英文》と翻刻されている。
85	〃	○芦田委員長 保持セズト云フナラハ自分ノ決心ダガ、「オーソライズド」ト云フ字ヲ使ツタ所ハ外ニナイデセウ、此處ニ限ツテ「ネヴァ・ビー・オーソライズド」ト斯ウ書イテアル、ソレガ何トナク我々ニハ辛イノデ、ソコデ保持シテハナラナイト云フヤウナ、一種ノ受動的ナ形デナク、自發的ニ之ヲ保持セズト……	原本第6冊 177-178 頁。 * 傍線部分欄外 (177 頁) に《イキル》と書込み。
86	〃	○芦田委員長 是ハ餘リ良イ翻譯デモアリマセスケレドモ、「ナット・メーテン・ザ・ランド・シー・エンド・エア・ホーシズ」——「ネヴァ・ビー・オーソライズド」ト云フヤウナコトハ書カナイデ、斯ウ云フ風ニデモシタラ……	原本第6冊 179-180 頁。 * 傍線部分欄外 (179 頁) に《イキル》と書込み。
87	〃	○吉田 (安) 委員 […] ドウモ第二項ヲ見マスト、是ガ此ノ儘デ憲法トシテ残リマス以上ハ、將來之ヲ讀ム度毎ニ、國民ノ誰モガ如何ニモ他力ノ二情ナサヲ感ズルヤウナ氣ガシマス、隨テ委員長ノ仰シヤル通り、是ハ積極的ニ之ヲ保持セズ、之ヲ否認スルト言ツタ方が宜イノヂヤナイカト私ハ考ヘマス、是ハ許サレナイ、保持シテハナラナイト言フコトハ一種ノ情ナサヲ感ズル、[…]	原本第6冊 190-192 頁。 * 《將來…》部分欄外 (191 頁) に《イキル》と書込み。
88	〃	○鈴木 (義) 委員 […] 是ハ非常ニ心配シテ始終考ヘテ居リマシテ、佐藤君モ御存ジダガ、議場外ニ於テモ、ドウモアレハ心配ダカラ能ク國務大臣ノ意見モ聞イテ呉レ、順序ヲ變ヘルコトモドウカト色々話ヲシタ位デ、此ノ條文ハ恐ラク關係方面トノ關係ニ於テモ一番大事ナ條文ニナルト思フカラ、何事ハ決シテ蒸返シシナイガ、是ダケハ除外例トシテ蒸返シテモ宜イト思フ	原本第6冊 202-206 頁。 * 傍線部分欄外 (205 頁) に《イキル》と書込み。
89	〃	○廿日出委員 委員長ノ御心配ニナツテ居ル二項ノ所謂他動的ナ文句、何ダカ屬國デデモアルヤウニ國民ニ映ル卑屈ナ氣持、之ヲ完全ニ除キサヘスレバ、私ハ此ノ第九條ハ解決スベキ問題ヂヤナイカト思フ、實ハ新聞ニ載ツタ時ノ文ハ、是ヨリ違ツテ、「戦力保持ハ許されない。國の交戦權は認められない」、斯ウナツテ居リマス、ソコデ誰モ皆氣ヲ腐ラシタ、ソレガ今度此ノ文ニ現レタ時ニハ、「これを保持してはならない。」「これを認めない。」ト云フ程度ニナツテ居ル、是ハ變ツテ居ルト思ツタ、ソレヲ今度「保持せず」又ハ「保持しない」ト、ピシヤツトヤツテ置ケバ、非常ニ心ガサツトスルノデハナイカト思フ、ソレト同時ニ今前文ノコトヲ氣ニシテ居リマシタケレドモ、本當ニアノ前文アレダケノ内容ヲ含メタ前文、サウシテ最後ニ「誓ふ」ト云ウタ、アレガ宣言ダ、其ノ宣言ノ後ニ此ノ九條ガ直ク來ルト見テ私ハ何等差支ヘナイト思ツテ居リマス、長イ間私ハ是デ苦シンデ居ル、皆カラモ責メラレタ、此ノ點ダケデモ直サケレバナラヌト随分言ハレタ、ソコデドウカ第二項ノ所ハ何モ加ヘズニ、サツトヤツテ下サレバ一番解決スルノデハナイカト思ヒマス	原本第6冊 216-223 頁。 *1 《何ダカ…》部分欄外 (217 頁) に《イキル》と書込み。 *2 《長イ間…》部分欄外 (222 頁・223 頁) の2箇所 に《イキル》《イキ》と書込み。
90	〃	○笠井委員 此ノ憲法ニ付テハ、「隨分「マッカーサー」ノ方デモ力ヲ入レテ居ルラシイデスカ。」成ベク此ノ原案ニ餘程力ノアル文章ヲ作ツテ載キタイト思フ、認メナイトカ何トカ簡單デナク——左様ニ御願ヒシマス	原本第6冊 228-229 頁。 * 【削除16】228 頁欄外に《「」トル》と書込み。
91	〃	○江藤委員 私モ大體今ノ笠井サンノ御意見ト同ジデス、成タク斯ウ云フコトハ原案ヲ忠實ニ作ルヤウニト云フコトデ宜イノヂヤナイカト思フ、サツキノ鈴木サンノ御話ニモアリマシタヤウニ、私等ハサウ	原本第6冊 230-231 頁。 * 傍線部分欄外 (231 頁) に《イ

		抑へ付ケラレト云フヤウナ感じヲ殊更持タナイノデスケレドモ…	キ」と書込み。
92	〃	○芦田委員長 ソコハ非常ニ意見ガアル所デアリマシテ、感情ト云フカ、趣味ノ問題デ、勿論是デ何デモナイ人モ澤山アルニ違ヒナイ、又之ヲ見ル度ニ始終ノ惜シイ氣持ノスル人モアルノダカラ、是ハモウ百人百様ノ印象ヲ受ケルノデ、決シテ其ノ感情ヲ強ヒヨウト云フ趣意デハナイノデスガ、併シ相當ニ神經ヲ起ス人ガアルトスレバ、神經ノ起ラナイヤウナモノニ直スコトガ出来ナイカト云フ問題ニ過ギスノデス	原本第6冊 231-233 頁。
93	〃	〔「○鈴木（義）委員 「アメリカ」ノ憲法ニ書イテアルコトナラ點ツテ通スガ、「フランス」ヤ「ソ」聯ヤ「ドイツ」ノ憲法ニ書イテアルノハ通サナイト云フヤウナ意見ガ非常ニ強イノデ、我々心外ニ思ツテ居ルノデス!〕	原本第6冊 296-297 頁。 *【削除17】296 頁欄外に「 「トル「 」と書込み。
94	〃	○北（昀）委員 是ハ重大ナ問題ダト私ハ思フノデスガ、無補償デ沒收シテモ宜イト云フヤウナ規定ヲ無暗ニ此處ヘ入レルト—私ハ今日〔「渉外局ノ當局カラ聴イタノデスガ、農地問題ニ付テ、即チ「ロシヤ」ノ提案ハ、御承知ノ如ク三町歩カラ六町歩マデハ地主ノ持ツテ居ルモノハ時價ノ五割ヲ、六町歩以上ハ無償沒收スル、英國ガソレニ強硬ニ反對致シマシタ、!〕如何ニ日本ノ農地制度ヲ合理化シテ小作人ヲ解放スルト言ツテモ、國家ガ買収シテ小作人ニ渡ス以上ハ、無償ト云フコトハイケナイ、日本ノ現實ニ即シナイ、ソコデ全部有償ニスルト云フ論デ、中華民國ノ代表者モ英國ノ提案ニ賛成シテ居ツタノデスガ、私有財産ト云フモノラ公共ノ必要上、國家ノ必要上ソレヲ沒收スル時ニ於テハ、或ル程度ノ補償、大小ハ兎モ角モ無償ニシテモ宜イト云フ規定ヲ入レルコトハ私ハイカスト思フ、對日理事會ニ於ケル農地法案ノ審議ノ結果ニ於テ、「ロシヤ」ダケハ孤立シテ居ル、是ハ私ハ重大ナ反省ヲ要スルト思フ、私ハ絶対的ニ賛成デアリマセス	原本第6冊 547-553 頁。 *【削除18】548 頁欄外に「 「トルコト」と書込み。
95	〃	○北（昀）委員 僕ノ聞ク所ニ依ルト、唯沒收ト云フ形デハイケナイカラ、一旦拂ツタト云フ形デ税金デ取ル、是ハ寧ロ「アメリカ」側ノ意見デス、ソレ程私有財産ト云フモノハ一通リ尊重シテ掛ルト云フ建前ニナツテ解決スルノデ、全然補償ガナクシテ、公共ノ爲メ必要デアルカラト云フコトデハ、ソレハ大變ナコトデスヨ	原本第6冊 563-565 頁。 *《僕ノ…》部分欄外（563 頁）に《イキル》と書込み。
96	〃	○北（昀）委員 私ハソレデ結構ダト思フ、現在對日理事會ノ凡ユル原則ヲ聴イテ見ルト、英國側ノ「ロシヤ」ニ對スル辯駁ガ其ノ論旨カラ出テ居ル	原本第6冊 572-573 頁。 * 傍線部分欄外（572 頁）に《イキ》と書込み。
97	〃	○鈴木（義）委員 ソレダカラ我が黨ガ提案シタ時ニハ、關係方面ニモ行ツテ説明シテ來タノデスガ、我が黨ノ、「私有財産ハ、正當な補償の下に、これを公共のために用ひることができる。」、此ノ原則ハ動カナイ、併シ極メテ稀ナ場合ニ、大規模ナ國家企業ニ移サユナ時ニ、全部補償ヲ給シ切レナイコトガアル、サウ云フ特別ノ財産ニ付テダケ、議會ノ議決ヲ經テ補償ヲ給シナイコトガアリ得ル、ソレハ技巧的ニヤレバ補償ヲヤツコトニシテ又取返ス、ソレハ同ジコトダケレドモ、サウ云フコトヲセズニ、ヤハリ特別ノ場合ニハサウ云フ例外ガ開カレルト云フコトヲ決メテ置ク方ガ宜イト思フ、 <u>私ガ其ノ説明ヲシタ時ニ、アチラノ人ハ背イテ居リマシタ</u>	原本第6冊 573-576 頁。 *《私が…》部分欄外（576 頁）に《イキ》と書込み。
98	〃	○笠井委員 ……モウツ此ノ場合申上ゲタイコトハ、前文ニ於キマシテハ、私ハアノ前ノ國政ト云フコトヲオヤリニナツタガ、是ハ政府デゴザイマス、其ノ根據ハ何處ニアルカト言ヘバ、 <u>實ハ先程「マッカーサー」司令部ヘ行ツテ会歸ツテ來マシタガ、皆ニ寄ツテ戴イテ聽</u>	原本第6冊 863-867 頁。 * 傍線部分欄外（865 頁）に《イキル》と書込み。

		キマスト「アクション・オブ・ガヴァーメント」ト云フノ政府ト云ツテ居ル、ダカラ皆サンハ御反對デアリマシタケレドモ、最後マデ政府ト云フコトガ正シト云フコトラ考ヘテ居リマシタ、ソレヲ今究メテ來シタカラ、其ノコトラ一寸……	
99	第 8 回	○芦田委員長 ソレデハ社會黨ノ修正案ニ移リマス、社會黨ノ提案ハ、第一章ノ初メニ、新シク第一條ヲ起シテ、主權ハ國民ニアルト云フ規定ヲ入レタイ、斯ウ云フ提案デアリマス、之ニ對シテ自由黨及ビ進歩黨ノ考ヘ方ハ、政府案ノ第一條ニ於テ、英文ノ翻譯ニ於テハ「ソヴァレーン・ウィル」ト云フ言葉ヲ使ツテアツテ、之ヲ譯シテト言フカ、其ノ「テキスト」ノ日本語ニモ「國民の至高の總意に基く。」ト云フコトハ、實ハ國民ノ主權的意思ニ基クダト言フ意味ヲ諷ツデアルノダケレドモ、ソレハ曖昧デアリ、明確デナイカラ、隨テ改正案第一條ノ終リニ、「この地位は、主權の存する日本國民の總意に基く。」ト、斯ウ言フ風ニスレバ、第一章ノ天皇ト言フ中ニ主權ノ問題ヲ包含シテ規定スルコトガ出來ル、[…]	<p>原本第 7 冊 17-21 頁。</p> <p>*1 《英文ノ…》部分及び欄外の 2 箇所 (18 頁) に《イキ》と書込み。</p> <p>*2 《之ヲ譯シ…》部分及び欄外の 2 箇所 (19 頁) に《イキ》と書込み。</p>
100	〃	○北 (時) 委員 […] 近代的ノ方デハ、國際法ガ國內法ニ優位スルト云フ議論ガ行ハレテ居ル、是ハドチラモ根據ガアルコトデアルガ、從來ハ不戰條約ナドモ日本ガ調印シテ居リナガラ、破ツテ居ル、九箇國條約モ破ツテ居ル、是ガ「アメリカ」邊リカラ、日本ノ支那事變ナドニ對シテ抗議ヲ申込マレタ點デアル、[…]	<p>原本第 7 冊 88-91 頁。</p> <p>* 傍線部分欄外 (90 頁) に《イキ》と書込み。</p>
101	〃	○笠井委員 前ニ米國ノ憲法臭イ所ガアルト云フコトヲ取ツタコトガアル、[並びにこれに基いて制定された法律及び條約は] ト云フノハ、之ヲ再ビ生カスコトハ如何デセウカ	<p>原本第 7 冊 107-108 頁。</p> <p>* 傍線部分欄外 (107 頁) に《イキ》と書込み。</p>
102	第 12 回	○金森國務大臣 今日此ノ八十四條ノ委員會ノ議案ヲ拜見致シマシテ、其ノ後ニ於キマシテ過去ノ色々ナ道行キヲ述ベマスルコトハ、意味ガナイト言ヘバサウモナリマスルガ、併シ相當ニ道行キノ長カット問題デゴザイマスノデ、御參考ノ爲ニ、且ツハ又政府ノ心持ヲ表明致シマスル爲ニ、一言申述ベサシテ戴キタイト存ジマス、 <u>義ニ此ノ小委員會ノ第八十四條ニ関シマスル御修正ノ御心持ガ關係方面ニ齎サレマシタ後ニ於キマシテ、先方「『カラハ非常な色々ナ言葉ヲ以テ、政府ノ方ニ極ク内密ニ働キ掛ケテ來ラレタ譯デアリマス、大体第八十四條ノ政府原案ニ對シマスル G・H・Q 側ノ考ヘハ可ナリ徹底シタ考ヘヲ持ツテ居リマシテ』、今日皇室ガ普通個人ノ持ツト違ツタ特殊ノ意味ノ財産ヲ從來通りニ御持チニナルト云フコトハ、新シキ體制ヲ整ヘテ行ク所ノ日本ノ政治ノ上ニ甚ダ好マシクナイ影響ヲ及ボスノデアル、詰リ國家ノ中ニ於ケル皇室ノ純粹性ヲ確保スル所以デハナイ、斯ウ云フヤウナ見地ニ立ツテ向フハ主張ヲ持ツテ居ツタ譯デアリマス、』ソノコデ現在ノ皇室關係ノ財産ニ付キマシテハ、制度ヲ根本的ニ改メテ、新シキ姿ノ天皇制ニ依ル天皇ノ御地位ニ相應シモノニシナケレバナラヌト云フコトラ、改正憲法ノ謂ハバ基本的原則トシテ堅持シテ居ツタノデアリマス、ソレニ基イテ我々色々ナ論點ニ付テ意見ヲ聽イテ居ツタ譯デアリマス、所ガ此ノ小委員會ノ義ノ御意見トシテノ修正ノ考ヘ方ニ付キマシテハ、世襲財産ハ殘シテ置イテ、而モ皇室財産ノ收益ガ自由ニ皇室ニ流レ込ムト云フ形ニナツテ居ルト云フ點ニ付キマシテ、可ナリ先方ノ、或ハ疑惑ト申シマスルカ、懸念ト申シマスルカ、サウ云フヤウナ氣持ヲ抱イテ、是ハ義ニ述ベマシタヤウナ憲法改正ニ付テ基本的原則ヲ壞ス虞ガアルト云フ趣旨ヲ以テ、強イ反對ノ意向ヲ内々ニ政府ノ方ニ表明シテ來テ居ツタ次第デアリマス、『我々ト致シマシテハ何トカシテ妥當ナ解決點ニ到達シテ、然ルベ</u>	<p>原本第 7 冊 561-618 頁。</p> <p>*1 【削除 19】《先方カラハ…》部分欄外 (563 頁) に《「」トル》と二重の書込み。なお、《先方カラハ…》部分には、削除後の修正を示唆する《デハ》との書込みがあるが、棒線で消されている。</p> <p>*2 《可ナリ…》部分欄外 (571 頁) に《イキ》と書込み。</p> <p>*3 《憲法改正…》部分欄外 (572 頁) に《イキ》と書込み。</p> <p>*4 【削除 20】《我々…》部分欄外 (572</p>

		<p>キ結果ヲ得タイト云フヤウニ百方苦心ヲ致シマシタガ、中々先方ノ得心ヲ得ルコトガ出来ナイノデアリマシテ、コチラノ道理ト思フ所信ヲ主張致シマシテモ、結局之ヲ貫キ得ルヤウナ結論ニ到達スルコトガ洵ニ困難デアツタ譯デアリマス、」ソコ段々考ヘテ見マスト、小委員会ノ側ニ於キマシテ、一番此ノ政府原案ノ八十四條ノ缺點トサレマシタ點ハ何カト言ヒマスレバ、ソレハ皇室財産ノ収益ガ悉ク國庫ニ歸屬スルト云フ點デアツテ、普通ノ法律上ノ考ヘ方デハ道理ヲ發見シ得ナイコトデアルト云フノミナラズ、皇室ニ對スル一般國民感情トモ適合シナイト云フ所ニアルノデアラウト推測ヲ致シマシタノデ、『其ノ點ヲ中心トシテ何等カ向フノ考ヘニ打開ノ途ヲ吹込マウト云フ風ニ思ツタ譯デアリマス』、所ガ』是ハ結局世襲財産ト云フコトガ憲法ノ中ニ規定セラレテ居ルコト云フコトヲ中心トスル所カラ來テ居ル問題デアルノデアリマシテ、ソコデ之ヲ極メテ淡白ナ形テ解決スル外ニ途ハナイト云フ氣持ニナツタノデアリマス、此ノ政府ノ原案ニ世襲財産ト云フ言葉ヲ使ツテ居リマスルガ、此ノ世襲財産ノ中デ實體トシテ漠然ト考ヘラレテ居リマシタモノハ、國家的ト申シマスルカ、或ハ公的ト申シマスルカ、サウ云フヤウナ性格ヲ持ツタ財産ノ部分ト、然ラザル部分トガ若干混合シテ居ルト云フ風ニ申上ゲル外ハナイト思ツテ居リマス、此ノ際此ノ點ヲハツキリ致シマス爲ニ、公的ノモノハ淡白ニ國ニ移シテシマフト云フ建前ニスルコトガ賢明デアルト考ヘタノデアリマス、其ノ意味ニ於キマシテ「世襲財産以外の」ト云フ言葉ヲ削除スルコトハドウカト云フ主張ヲ致シマシテ先方ノ意向ヲ叩イテ見マシタ所、漸ク其ノ同意ヲ得タ譯デアリマス、[...] 唯世襲財産ノ範圍ト致ハシマシテハ、先方ハ當初カラ御料林ノヤウナ大キナ収益ヲ生ズルモノヲ認メルコト云フ考ヘハドウモナイヤウニ推察サレタノデアリマス、[...] 尚ホ今申上ゲマシタ言葉ノ半面ニ於キマシテ、規定ノ表ニハ出テハ居リマセヌガ、陛下ノ私有財産ハハツキリト御手許ニ確保セサルコトニナル譯デアリマ『シテ、隨テ今回ノ憲法改正案第八條ノ規定ヲ適正ニ運用スルコトニ依リマシテ、天皇ノ私有財産ガ充實シテ行ク可能性ト云フモノモアリ得ル譯デアリマス、詰リ御内帑金ガ或ル正シキ道行キノ元ニ蓄積セラレテ行クト云フコトガ出来得ルト思フノデアリマス』、[...]」</p> <p>尚ホ細カイ色々ノ點ヲ取扱ヒ等ニ付キマシテハ、多少私共モ考ヘテ居ル所ガアリマスルシ、宮内省當局ノ意見等モ聞イタ所ガアリマスルシ、[「尚又断片的ナコトデハアリマスルガ、關係方面ノ意見ニ付テモ諒解シテ居リマスルケレドモ、」]是等ヲ現実ニ如何ナル形ニ於テ組ミ直シテ実行シテ行クカト云フ點ニ付キマシテハ、公ノ此ノ場ニ於キマシテ申上ゲルニハマダ不適当ナ部分ガ多イノデアリマスカラ、今日ノ所見トシテハ是ダケニ止メサシテ戴キタイト思ヒマス、[「ソコデ無論御如オハナイト思ヒマスガ、只今マデ私ノ述べマシタ所ハ、對外關係ノ上ニ相當機微ナ点ヲ持ツテ居リマス、先方ノ意見ト致シマシテハ、實ハ私共ダケニ特ニ示シテ呉レタヤウナ次第ノモノヲ含ンデ居リマスルノデ、御聽取下サイマシタ後ノ其ノ取扱ニ付キマシテハ、ソノ趣旨ヲ御含ミノ上、十分御留意ヲ御願ヒ致シタイト存ジテ居リマス」]</p>	<p>頁)に「[]」と書込み。</p> <p>*5【削除21】《其ノ點…》部分欄外(576頁)に「[]」と書込み。</p> <p>*6《先方ノ…》部分欄外(582頁)に《イキ》と書込み。</p> <p>*7《先方ハ…》部分欄外(588頁)に《イキ》と書込み。</p> <p>*8【削除22】《隨テ…》部分欄外(595頁)に「[]」と書込み。なお、削除箇所冒頭の《シテ》部分に、黒鉛筆で取消線が引かれており、そこに削除後の修正を示唆する《ス》の書込みがある。</p> <p>*9【削除23】《尚又…》部分欄外(614頁)に「[]」と書込み。</p> <p>*10【削除24】《ソコデ…》部分(616頁)の欄外に《「トル」》と書込み。</p>
103	々	<p>○金森國務大臣 英語ノ方ノ言ヒ表ハシ方ヲ御覽下サイマスト分リマスガ、[「現在ノ政府提出案ニ付キマシテモ、是ハ可ナリ分リニクイ英文デゴザイマス、是ハ結局日本人ト「アメリカ」人トノ物ノ見方が違フノニ、兩方ノ立場デ文字ヲ協定シタノデゴザイマスカラ」]、豫算ニ計上ダケデ宜イノヲ、更ニ之ヲ重カラシムル爲ニ、國會ノ議決ヲ經</p>	<p>原本第7冊 629-633頁。</p> <p>*【削除25】《現在ノ…》部分欄外(630頁)に《「トル」》と書込み。</p>

		ルト云フ風ニツ竝ベタ譯デス、サウスルト之ヲ適切ニ言ヒ表ハス方法ト云フモノガ日本文デハ中々巧ク出来マセヌ、ソコデ政府ガ糞ニ提出シタ基本改正案ニ於キマシテモ、其ノ点ノ字句ハ可ナリ分リニクイ文句ニナツテ居マス、今日此處デ御決メニナリマシタ御修正ノ案文、是ハ今マデノ經過ヲ基本トシテ居リマス爲ニ、日本文トシテハ今仰セニナリマシタヤウナ論議ノ起ル餘地モアルト思ヒマスガ、[...]	
104	〃	○佐藤達夫君 是ハ申上ゲテ宜イカドウカ知りマセヌガ、我々ハ最初ノ案ト今ノ案トラ比ベテ見マシタ感ジハ、國會ガ議決シテ皇室ニ費用ヲ差上ゲルト云フ氣持ハ、前ノ案ヨリ此ノ新シイ案ノカガ表ニ出テ居ルヤウナ氣ガシマス、サウシテ英文ノ譯語ヲ見マシテモ、ヤハリサウ云フ風ニシナケレバナラスモノダト云フ氣持ガ現ハレテ居リマス、ソレガ政府ノ最初ノ草案デハ、金森國務大臣ガ言ハレタヤウニ、國會ノ議決ヲ經ルト云フコトニ重味が掛ツテシマツテ横文字トモ一致シナイヂヤナイカト云フ點ガアルト思ヒマス	原本第7冊 645-648 頁。 *1《英文ノ…》部分と欄外（646 頁）の2箇所にて「イキ」と書込み。 *2《横文字…》部分と欄外（648 頁）の2箇所にて「イキ」と書込み。
105	〃	○佐藤達夫君 [...] 寧ろ今日ノ案ノヤウニシマスレハ國會ノ議決スル豫算ト云フモノニ必ズ組込シテ、サウシテ是ハ國カラ差上ゲルト云フ氣持ガ出ハシナイカ、而シテ英文ノ方ハサウ云フ感ジガ出テ居リマス、然ルニ日本文ノ最初ノ草案ノ方デハ、其ノ氣持ガ出テ居ナカッタノデハナイカ、是ハ全ク私個人ノ感ジカモ知レマセヌガ、ヤハリ同様ノ感ジヲ抱ク人ガ他ニモアルヤウニ見受けラレマシタノデ……	原本第7冊 663-667 頁。 * 傍線部分欄外（666 頁）にて「イキ」と書込み。
106	〃	○林（平）委員 私人申シマセヌケレドモ、變ヘテ其ノ筋デ大シテ差支ヘナイナラバ、變ヘルノガ本筋ダト思ヒマス	原本第7冊 673-674 頁。 * 傍線部分欄外（674 頁）にて「イキ」と書込み。
107	〃	○廿日出委員 [...] 此ノ憲法ハ誰ニ示スノデモナイ、國民ニ示ス、國民ト天皇ト一緒ニ此ノ憲法ヲ永遠ニ守ラナケレバナラスノデスカラ、此ノ言葉タケデモ除イテ下ツタナラバ、兎モ角此ノ議院内ノ相當多數ノ人々ノ尖ツタ心モ和ラクノデハナイカト思フ、若シ之ヲ此ノ儘残ストスルナラバ、私が先達デ御説明申シマシタアノ精神ヲ徹底シテ、議員又ハ一般ノ人々ニ分ラセナイト云フト、総テ皇室ノ財産ハ國ニ属スル、何モ彼モ取上ゲル、宮城マデ取上ゲテ國ノモノニシテシマス、斯ウ云フ簡單ナ言葉デ片付ケラレテ非常ニ空氣ガ悪イノデアリマス、ココデ私ハ結局行詰ツテシマツテ、成ベクナラバ現在ノ段階ニ於テハ、「すべて皇室財産は、國に属する。」ト云フ言葉タケラ除イテ下サラナイカ、[[[下手ヲスレバ、是ハ私自身ノ命ノ問題ダ]]]自動車ノ中デ、而モ社会党ノ有力ナ人ガ、皇室ノ財産ハ総テ國ニ属スルト云フノハ中々大變ダナト云フヤウナ話ヲシテ居タ [[、[洵ニ一人死ナナケレバ]此ノ憲法問題ハ解決シナイト曾テ言ツタコトガアルガ、実ハサウナルカモ知レスト云フ位ノ悲壯ナ氣持デアリマス]]]、是非オ互ヒニ小委員ノ人々ハ反省シテ戴イテ、一番最初申上ゲタヤウニ、是非、ナルコトナラバ之ヲ削除スルコトガ出来ナイモノカ	原本第7冊 679-689 頁。 *1《尖ツタ…》部分欄外（683 頁）にて「イキ」と書込み。 *2【削除26】《下手ヲ…》部分欄外（686 頁）にて《「トル」》と書込み。 *3【削除27】《洵ニ…》部分欄外（687 頁）にて《「トル」》と書込み。
108	〃	○芦田委員長 [...] 自分限りノ私見デハアリマシタケレドモ、[[[G・H・Qノ「ウィリアムス」ガ来タ時]]]第八十四條ニハ、「皇室ノ費用は、予算に計上して國會の議決を経なければならない。」ト云フ箇條タケラ殘シテ、其ノ他ノ皇室財産ノ処分ノ問題ハ經過規定デアルカラ、是ハ取ツテ差支ヘナイ文句デアルト云フコトヲ話シタ[[所ガ、此ノ経緯ハ糞ニモ申シタ思ヒマスガ、ソレモ一ツノ考ヘ方デアルカラ、帰ツテ直グ上ノ人ニ話シテ見ル、サウシテ明日中ニ返事ヲスル、斯ウ云フコトヲ約束シテ帰ツタ、之ヲ上ノ方ニ話シテ見タ所ガ、何等之ニ対スル回答ヲ「ウィリアムス」ニ與ヘテ呉レナイト云フノデ、	原本第7冊 690-703 頁。 *1【削除28】《G・H・Qノ…》部分欄外（691 頁）にて《「トル」》と書込み。 *2【削除29】《所ガ…》部分欄外（692 頁）にて《「トル」》と書込み。

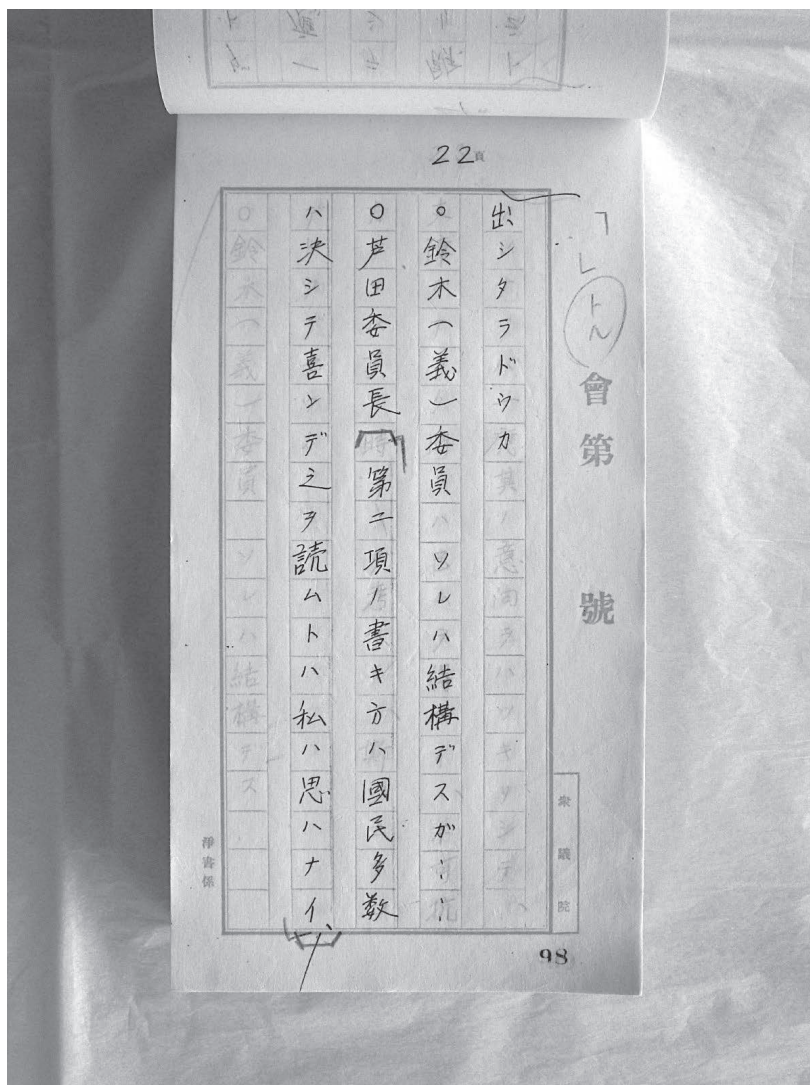
		<p>今度電話テ委員課ノ方ニ返事ガアツタ、サウ云フ事情デアルカラ、 <u>急ニ返事ハ差上ゲラレナイ、斯ウ言ツテ来タ、</u>』ソレハ私ノ直接関係 シタダケノ事実デアリマスガ、尚ホ政府ノ方ニ於テモ、サウ云フ意 味ニ於テナリ事務的ノ折衝ヲ続ケラレタト聞イテ居リマスガ、若シ 全然削除シテシマフコトガ困難デアルナラバ、セメテ初メノ半分ヲ憲 法ノ補則ニ入レテ貰ヒタイ、憲法補則ハ主トシテ経過規程ヲソコニ盛 リ上ゲテアルノデアツテ、八十四條ノ初メノ半分モ経過規定デアルノ デアルカラ、形トシテモ其ノ方が宜シイ、ドウカ経過規定トシテ、セ メテハ八十四條カラ切離シテ貰ヒタイト云フ案モ持ツテ行カレタト 仄聞シテ居ル、『然ル所、先方ハ中々其ノ点ニ承諾ヲ背ジナイ、結局 火曜日ノ夜ト記憶シマスガ、総理大臣ガ「マツカーサー」元帥ト直 接話シマシタ結果、其ノ目的ヲ貫徹スルコトガ困難デアルト云フ事 情ガ分ツテ、是レ以上政府当局ノカデハドウニモナラヌト云フコトニ ナツタノダト聞イテ居リマス、』』ソレデスカラ、此ノ一週間ニ亘ツ テ政府モ議會モ其ノ点ニ付テハ相當ニ努力ヲシタガ、其ノ目的ヲ達シ ナカツタ、斯ウ云フノガ今日ノ結果デアルノデアリマス、正直ニ申セ バ、議會ハ独自ノ権限ニ依ツテ其ノ規定ヲ省クコトガ出来ルト思ヒマ ス、『併シソレヲナシタ後ノ結果ハドウナルカト云フコトヲ考ヘテ見 レバ、或ハ大局ノ爲ニ犠牲ヲ忍ビテ、占領軍ノ意向ヲ或ル程度尊重 スルコトガ國家ノ爲ニ有利デアルカ、有利デナイカト云フ問題ニ帰着 シテ居ル訳デス、』』、ソレデドウスルカ、斯ウ云フコトダト私ハ思フ ノデス、是ハ私ノ私見デアリマス」</p>	<p>*3【削除30】《然ル所…》部分欄外 (698頁)に《「トル」と書込み。</p>
109	〃	<p>○廿日出委員 〔…〕本當ニ日本國ト皇室ト云フモノガ一体デアル、 象徵トシテノ天皇陛下ノ御性格カラ一切ノ生キ寫シニナラナケレバ ナラス、又本當ノ意味ノ不偏不黨ノ天皇陛下ハ、私事モ私物モ一切御 持チニナラス、所謂本當ノ聖ナル存在デアル、之ヲ現神人ト拜ンデ居 ル、斯ウ云フ意味カラ、ドウシテモ國民ニ分ラセル、私ハ分ラセル自 信モアリマスガ、唯憲法ニ斯ウ謳ツテ、之ヲ本會議デ色々議論シ、讀 ンダ時ニ、昔カラ凝リ固マツテ居ル人ハ、コンナ憲法ヲ待テヨト云 フコトニナリハシナイカ、私ハ是ハ相當ノコトデハナイカト思ツテ居 ルノデアリマス</p>	<p>原本第7冊 704-709頁。</p> <p>*1 ママ部分（707頁）は、活字版 では《現人神》となっている。</p> <p>*2 傍線部分欄外（708頁）に《イ キル》と書込み。</p>
110	〃	<p>○鈴木（義）委員 〔…〕ヤハリ純然タル私の財産、公の財産ノ區別 ハアリ得ルト思ヒマスカラ、サウ云フコトハ將來必ズ問題ニナルト思 フ、憲法ガ施行サルレマデノ間ニ出來ルダケーツ明瞭ニシテ、 何ト何トハ私の財産トシテ留保サレルノダト云フコトハ關係方面ノ 諒解ヲ得テ置カケレバナラス問題デアルト思ヒマス、後ニ之ニ對シ テ不平等議論ノ題材ニナラナイヤウニ御願ヒシタイト云フコトヲ此 處デ發言ランシテ置キタイト思ヒマス</p>	<p>原本第7冊 710-715頁。</p> <p>*1 ママ部分（714頁）は、活字版 では《何ト何ト何トハ》となつて いる。</p> <p>*2 傍線部分欄外（714頁）に《イ キ》と書込み。</p>
111	〃	<p>○芦田委員長 〔…〕唯普通一般人ノ觀念カラ言フト、皇族ノ御住居 マデガ國家ニ歸屬シテシマツト云フ極ク單純ナ言葉デ感情ヲ刺戟 サレル人が相當アルト私ハ思フ、ダカラ理論トシテ御分ケニナルト同 時ニ、國民感情ヲ能ク考察シツツ區分ヲ付ケテ載カナケレバ、憲法ノ 字句ノ爲ニ不測ノ結果ヲ招カストハ保證出來ナイト思ヒマス、無論政 府ニ於テ御如オハナイト思ヒマスガ、〔…〕</p>	<p>原本第7冊 716-721頁。</p> <p>*1 《單順ナ…》部分欄外（720頁） に《イキ》と書込み。</p> <p>*2 《憲法ノ…》部分欄外（721頁） に《イキ》と書込み。</p>
112	〃	<p>○金森國務大臣 宮城ト申シマシタノハ、國ノ象徵トシテ天皇ガ公式 ニ其處デ行動ヲ遊ハサル所、斯ウ云フ風ニ考ヘテ居リマス、但シ宮 城ノ中ガ私の部分、公の部分ト分レテ居ルト、是ハドウ云フ扱ヒテ行 クカハ今後ノ細カイ問題ダト思ヒマスガ、大體向フノ連中ト話ヲ進メ</p>	<p>原本第7冊 724-733頁。</p> <p>*1 《大體…》部分欄外（726頁）に</p>

		<p>テ居ル所デア、天皇ノ御別荘ト云フヤウナモノハ大體私的ト云フ諒解ヲ以テ進ンデ居ルヤウニ考ヘテ居リマス、ソレカラ御身邊ノ物、或ハ科学研究所ノ如キモ亦大體ニ於テ私的ト云フヤウニ考ヘテ居リマス、サウ無理ナ考ヘン持ツテ居ナイヤウニ思ヒマス、唯山林ナド——是ハ明治ノ初メニ種々ナ経緯ヲ以テ、<u>本來國ノ働キヲ行ハレ場合ノ財源ニデモ供スル</u>ト云フ點ガ恐ラク目的デハナカツタカト云フ氣ガスルノデアリマス、サウ云フモノニナルト、之ヲ私的ト言フコトハ非常ニ困難ダト思ヒマス、或ハ又正倉院ノ御物ト云フヤウナモノニナルト色々ト考ヘラレルガ、大體或ル時期マデハ純粹ナ私的ナ物トシテ扱ハレテ居リマスカラ、結局私的ナ物トナルノデハナカラウカ、或ハ縁故アル御財産、例ヘバ宮中ニアル御先祖ノ御遺物ト云フヤウナ物ニナレバ、是モ亦私的ト云フコトニナルノデハナイカト思ヒマス、併シ突キ進ンダ場合ヲ考ヘマスト、上野ノ博物館ニ飾ツテアル或ル種ノ美術品ハ、形ハ一寸私的ノ物デハアルケレドモ、是ハ公的ノ意味ヲ持ツテ居ルノデハナカラウカト考ヘマス、是ハ緻密ニ考ヘテ行カナケレバ解決キマセヌノデ、概括的ニ國民感情ヲ否定スルヤウナ考ヘデ此ノ問題ヲ處理スルト云フヤウナコトニ決シテ考ヘテ居リマセヌ</p>	<p>《イキ》と書込み。</p> <p>*2 《サウ…》部分欄外 (727 頁) に《イキ》と書込み。</p> <p>*3 《本來…》部分欄外 (728 頁) に《イキ》と書込み。</p> <p>*4 《國民感情…》部分欄外 (732 頁) に《イキ》と書込み。</p>
113	第13回	<p>○芦田委員長 […] 本日御協議ヲシマス點ハ、原案第六十三條ノ「内閣總理大臣」ト云フ下ニ「國會議員の中から」ト云フ八字ヲ挿入スルト云フ點ガーツ、第六十四條ノ「國會の承認により」ト云フ字ヲ削ツテ、「内閣總理大臣は、國務大臣を任命する。」、其ノ次ニ「但し、その過半数は、國會議員の中から選ばなければならない。」ト新タニ一句ヲ挿入シテ、其ノ下ニアル「この承認については、前條第二項の規定を準用する。」ト云フ文字ヲ削リ、是ガ各派共同提案トシテ提出セラレタ案デアリマス、[「此ト提案ヲナスニ至ツタ理由ハ、専ラ關係方面ノ希望ニ依ルモノデアリマスケレドモ、」]本委員會ノ質疑應答ノ際ニモ、議院内閣制度ヲ採用シタ今日、何故ニ専ラ國會議員ノ中カラ内閣總理大臣若シハ國務大臣ヲ任命シナイノカト云フ風ナ質疑モアリマシテ、[…]</p>	<p>原本第7冊 767-774 頁。</p> <p>*【削除32】《此ノ…》部分欄外(771 頁) に《「トル」》と書込み。</p>
114	々	<p>○金森國務大臣 […] 實ハ昨日、即チ八月十九日ノ朝ニ至リマシテ、突然「マッカーサー」元帥ノ方カラ、吉田總理大臣ノ向フニ行カレルコトヲ求メテ參リマシタ、ソシテ向フヘ行ツテ話合ヒヲサレマシタ所、先方ノ意見ト致シマシテハ、「[極東委員會ノ意向トシテ主張セラレタモノガアツテ、ソレガ「ワシントン」カラ電報ヲ以テコチラニ傳ヘラレテ來タ、其ノコトハ大キナ憲法問題ノ全體カラ見レバソナンニ重要ナ論點デハナイヤウニ思フガ、隨テ又其ノ内容ヲ能ク考ヘテ旨ク善處シテ貰ヒタイ、斯ウ云フヤウナ希望ヲ加ヘラレタノデアリマシテ、ソシテ其ノ中味ノ事情ハ、是ハ先方ガハツキ言ツタカドウカ私ノ聽キ落シマシタケレドモ、途中ノ経緯ノ色々ナ道行キヲ經マシタ話ガ私ノ耳ニ入ツテ居リマスル所ニ依リマスルト、國務大臣ヲ選任致シマスルニ付テ、如何ナル者カラ之ヲ選任スベキカト云フコトニ付キマシテ、正直ナ所、政府提出ノ憲法ノ改正原案ニ付キマシテハ、「アメリカ」流ノ議論トモ言ハルベキモノガアル譯デアリマス、所ガ極東委員會ノ空氣ト致シマシテハ、「アメリカ」流ノ考ヘ方ニ對スル相當ノ反對ノ聲ガ強いノデアリマシテ、寧ロ之ヲ「イギリス」流ノ原理ニ依ルベキモノデアルト云フヤウナ譯ア、可ナリ内部ニ議論ガアツテ、ソレガ可ナリノ多數ヲ以テ「イギリス」流ノ原理ヲ採ルベシト云フヤウナ結論ニナツタライ、是ハ私が途中デ挟ミ込シタモノデアリマス、左様ナ次第デアリマシ</p>	<p>原本第7冊 773-804 頁。</p> <p>*1【削除33】《極東…》部分欄外(778 頁) に《「トル」》と書込み。</p>

		<p>テ、此ノ先方カラノコチラヘノ話込ミニ依リマスルト、※ニツノ點デアリマシデ』、第一ニ於キマシテハ、日本ノ憲法草案ノ第六十三條ヲ修正致シマシテ、其ノ中ニ内閣總理大臣ハ「シヴィリアン」タルコトヲ要スル、是ガ一點デアリマス、第二ハ、其ノ總理大臣ハ國會議員ノ中カラ指名サルベキモノデアルト云フコトデアリマス、次ニ政府草案ノ第六十四條ニ付テノ修正意見デアリマスルガ、ソレハ國務大臣ノ任命ニ關スル規定ノ中ニ於キマシテ、國會ノ承認ヲ經ベキ旨ノ條項ヲ削除シテシマフ、是ガ第一點デアリマス、ソレカラ國務大臣ハ總テ「シヴィリアン」タルコトヲ要スル、是ガ第二點デアリマス、ソレカラ國務大臣ノ過半数ハ國會議員ノ中カラ選バレベキモノトスル、是ガ第三點デアリマス、是ダケノ點ニ付テ修正ノ申入レガアリマシテ、日本側ニ於キマシテ適當ナ措置ヲ執ツテ貰ヒタイ、斯ウ云フ御希望デアツタノデアリマス、此ノ中「シヴィリアン」デナケレバナラナスト云フ意味ハ甚ダ分リニクイコトナノデアリマスルガ、色々研究ヲシテ見マスルト、マア「シヴィリアン」ト申シマスレバ、言葉ダケデ申シマスレバ、軍人デヤナイ者、非軍人ト云フコトニ當ルト思ヒマスルガ、日本ノ實情ニ於キマシテ、今後新タニ軍人が出來ルコトハアリマセヌシ、隨テ又新タニ非軍人ト云フモノガ出來ルコトモアリマセヌ、若シアレバ過去ノ歴史的ナ存在ガ残ツテ居ルト云フダケデアラウト思ヒマスルシ、且又非軍人ト申シマスルト、國民ノ義務トシテ軍務ニ就イタ人モ觀念的ニハ非軍人ト云フ中ニモ入りマシテ、相當ニハ日本トシテハ扱ヒニクイ點デハナイカ、斯ウ云フコトヲ考ヘテ居ツタ譯デアリマス</p> <p>ソコデ色々先方ト交渉ヲ致シマシテ、「シヴィリアン」ニ關スル規定ハ如何ニモ無意味デアリ、且ツ不都合ノ字句デアルカラシテ、ソレニ對シテ適當ナル相談ヲシタイト云フ希望ヲ述べマシテ、結局其ノ部分ハ問題ニ供シナイト云フコトヲ向フデ同意シタ譯デアリマス、<u>「察シマスルニ、ソレハ恐ラクハ日本ニ居ル先方ノ當局者ノ計ラヒデアラウト考ヘテ居リマス」</u></p> <p>左様ナ譯デアリマシテ、之ヲ如何ニ善處スルカト云フコトハ、今日ニナリマシテ甚ダ困難ナル問題デアリマスルケレドモ、小委員會デ雅量ヲ抱イテ戴キマスルナラバ、是ガ適當ナル形ニ更正サレ、國際關係モ旨ク行クノデハナイカ、斯ウ云フ考ヘ方ヲシテ居ル譯デス、内容ニ於キマシテハ、先程マデ申シマシタ経緯ニ依ツテ分リマスヤウニ、是ハ一ツノ理由アル行キ方デアツテ、私共毫モ不都合ナル點ガアラウトハ思ツテ居リマセヌ、考ヘ方ニ於キマシテ幾分ノ原案ニ對スル影響ハアリマスルケレドモ、筋トシテハコチラノ方ニモ十分理由ガアルヤウニ考ヘテ居リマス、<u>「以上ハ實ハ今日ハモウ全クアリノ儘ニ、一言一句ヲ粉飾スルコトナクシテ申上ゲタ譯デアリマスルガ、此ノ點ハ洵ニ恐入りマスケレドモ、先方ノタツテノ希望モアリマスルシ、又國際關係モアリマスルノデ、事已ムワ得ザルト同時ニ、斯ウ云フコトニ付テ「プレス」發表ヲサレルト云フコトヲ非常ニ嫌ツテ居リマスカラ、其ノ點ヲ一ツ十分ニ御含ミヲ願ヒタイト思ツテ居リマス、今日既ニ新聞ニ、事柄ノ本筋デアリマセヌケレドモ、一端ガ出テ居リマスケレドモ、其ノ歴史ガ出ルト云フコトハ非常ニ拙イノデアリマスカラ、皆サントウゾ御含ミ願ヒタイト思ツテ居リマス」</u>、私ノ申上ゲマスコトハ是ダケデゴザイマス</p>	<p>*2 《修正ノ…》部分欄外 2 箇所（790・791 頁）に《イキ》と書込み。</p> <p>*3 《ソコデ…》部分（796 頁）に改行の指示あり。</p> <p>*4 【削除 34】《察シ…》部分欄外（797 頁）に《「トル」》と書込み。</p> <p>*5 《左様ナ…》部分（798 頁）に改行の指示あり。</p> <p>*6 【削除 35】《以上ハ…》部分欄外（804 頁）に《「トル」》と書込み。</p>
115	々	<p>○金森國務大臣 向フハ「シヴィリアン」タルコトヲ要スルト言ツテ來テ居ルノデアツテ、其ノ意味ハ…</p>	<p>原本第 7 冊 805-806 頁。 * 傍線部分欄外（805 頁）に《イ</p>

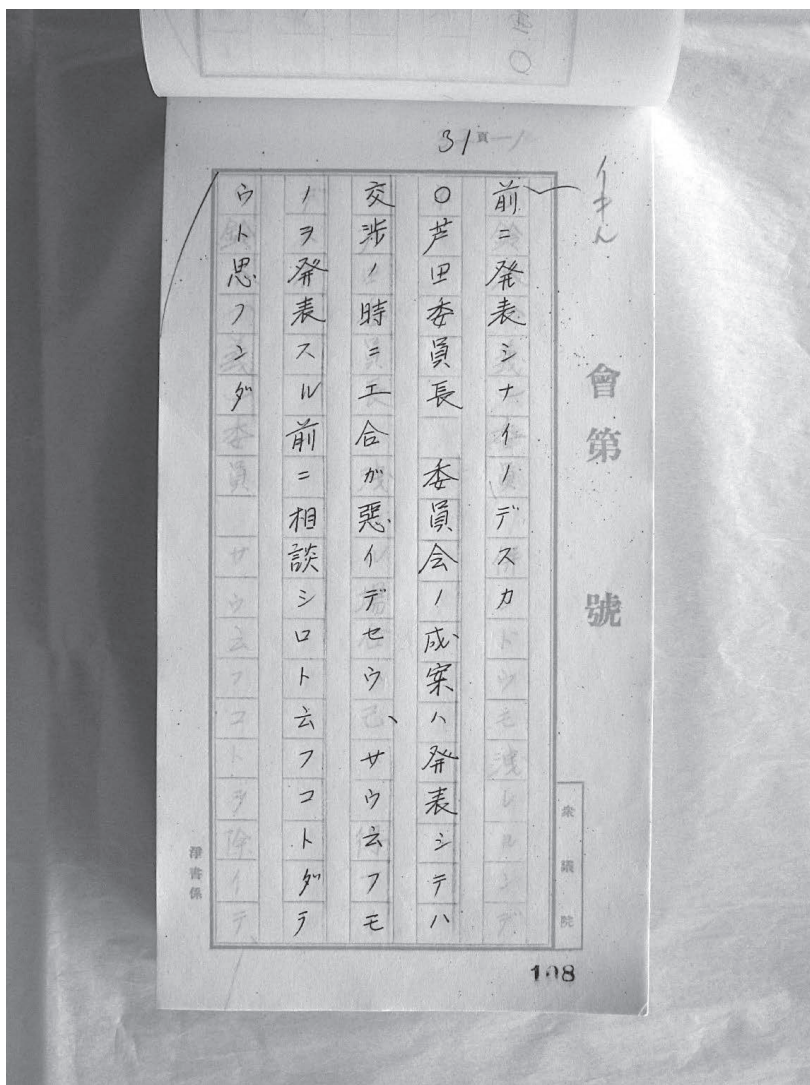
			キ」と書込み。
116	ク	〔「○鈴木（義）委員 「ブレス」ニ発表シナイコトハ私共注意シ マスケレドモ、新聞記者ト云フモノハ連モウルサイモノデスカラ、政 府カラ発表シナイヤウニ仰シヤツテ置ク方ガ宜イノチヤナイデスカ ……〕〕	原本第7冊 809-811 頁。 *【削除 36 の①】809 頁欄外に《「ト ル」》と書込み。
117	ク	○金森國務大臣 是ハ注意シテ下サイ、之ヲヤルト罰セラレルカラ ……〕〕	原本第7冊 811 頁。 *【削除 36 の②】
118	ク	○芦田委員長 「…」〔「ソレダカラ政府ノ説明ニ依ツテ關係筋ガ潔ク 之ヲ撤回シタ、斯ウ云フ風ニ私ハ解釋シテ居ル、私ノ解釋ガ當ツテ居 ルカドウカハ分リマセスガ、併シ私個人ノ見解ハサウ云フ風ニモ考ヘ ル餘地ガアリハシナイカ、斯ウ云フノデス〕	原本第7冊 840-850 頁。 *【削除 37】849 頁欄外に《「トル」 》と書込み。
119	ク	〔「○鈴木（義）委員 ソレハ至極御尤モデ、其ノ點ハ私モ異議アリマ セスガ、其ノ筋テハ撤回シタノデスカ——已ムヲ得ナイ、ソレデハ規 定セスデモ宜イト言ツタノチヤナイデスカ ……〕〕	原本第7冊 850-851 頁。 *【削除 38 の①】850 頁欄外に《「ト ル」》と書込み。
120	ク	○佐藤達夫君 「シヴィリアン」ノ御話ハ、今金森國務大臣ガ申シマ シタヤウニ、コチラカラサウ云フ理由ヲ述ベマシテ説明シタノデス、 金森サンハ婉曲ナ言葉テ説明シタノデス、サウシテ G・H・Q ノ出先 ノ責任ニ於テ宜シト云フコトニナツタラシイノデス〕〕	原本第7冊 851-852 頁。 *【削除 38 の②】
121	ク	〔「○笠井委員 サウスルト、「シヴィリアン」ヲ撤回シタノデスカ ……〕〕	原本第7冊 856 頁。 *【削除 39 の①】同頁欄外に《「ト ル」》と書込み。
122	ク	○佐藤達夫君 初メカラ、コツチノ出先ハワカシイナト云フ氣持ヲ持 ツテ居タラシイ、併シ向フカラ來タコトデスカラ取次イデ居タラシイ ノデス、重ネテ我々ノ方カラ押シテ行キマシタ所ガ、割合簡單ニ承知 シタラシイ、ソレハ向フトノ連絡ナシニ、コチラ限リノ出先ノ措置ト シテヤツタノデス ……〕〕	原本第7冊 857-858 頁。 *【削除 39 の②】
123	ク	○笠井委員 ドウモ有難ウゴザイマシタ〕〕	原本第7冊 858 頁。 *【削除 39 の③】
124	ク	〔「○鈴木（義）委員 質問ハ異議アリマセスガ、〔答ヘノ方ガ——大 体分ルガ、答ヘモ承ツツ置カスト賛成ガ出來ナイノデスネ ……〕〕	原本第7冊 906-907 頁。 *【削除 40 の①】906 頁欄外に《「ト ル」》と書込み。
125	ク	○芦田委員長 答ヘハ正確ニハマダ政府カラ伺ツテ居ナイノデスケ レドモ、併シ政府ノ肚トシテ、此ノ間金森國務大臣ノ述ベラレタ趣意 ガ書付ニナツテ居ルノデス、速記ヲ止メテ……〕〕	原本第7冊 907-908 頁。 *【削除 40 の②】
126	ク	〔○鈴木書記官 サウデナイト意向ガハツキリ決マツテ、小委員會ノ 意向ガ確定シテ討論ヲスルト云フコトニナルノデ、ソレガ決マラナケ レバ、ココガ決マラナイト云フコトニナルカラ出來ナイ譯デス〕	原本第7冊 924-925 頁。 *【削除 41】924 頁欄外に《「トル」 》と書込み、同頁全体に斜線あり。

【資料3】削除の有無に関する指示例①（衆議院憲政記念館所蔵原本／2016年3月28日筆者撮影）



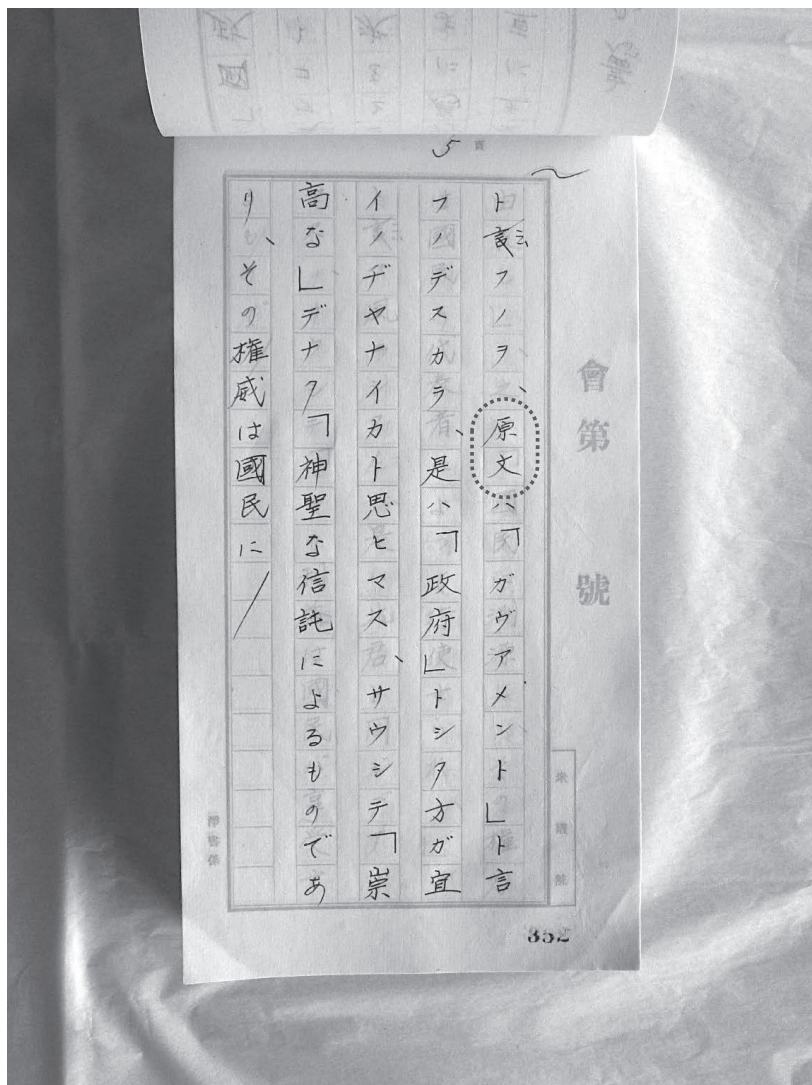
* 第4回小委員会における芦田均委員長発言（活字翻刻版89頁上段）。なお、書込みのうち、棒線及び亀甲括弧は赤鉛筆、また、欄外の《「」トル》及びカギ括弧は青鉛筆による。

【資料3】削除の有無に関する指示例②（衆議院憲政記念館所蔵原本／2016年3月28日筆者撮影）



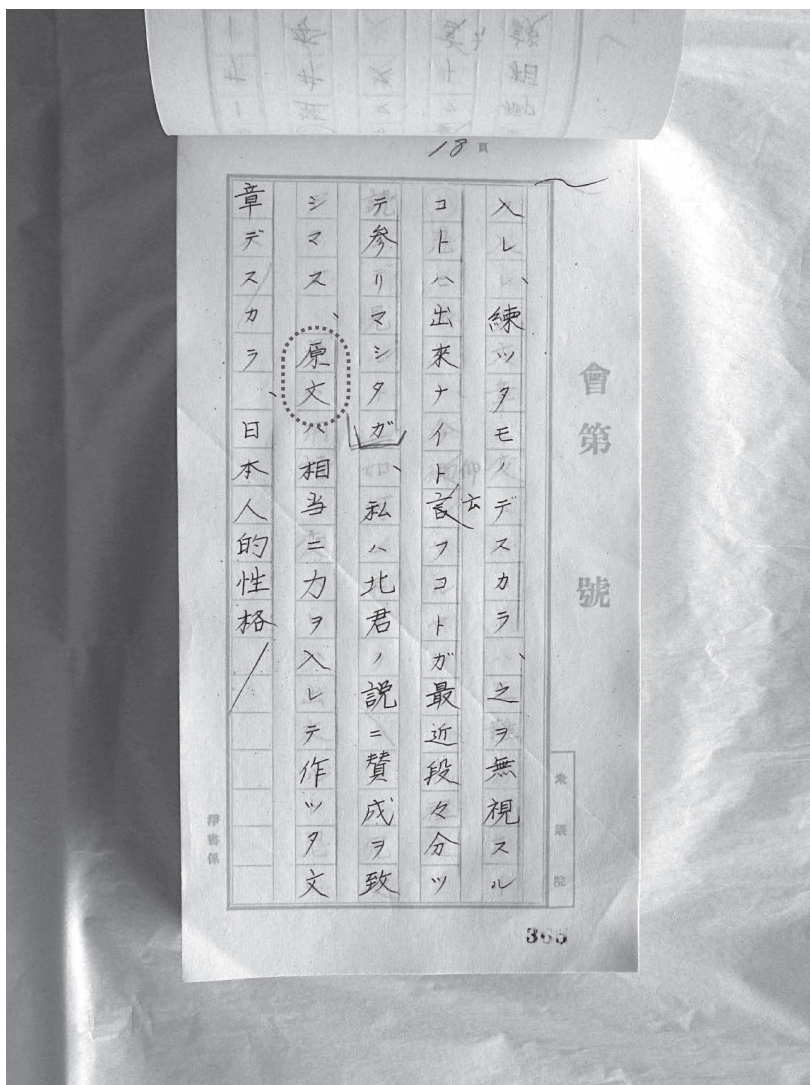
* 第4回小委員会における芦田均委員長発言（活字翻刻版89頁中段）。なお、いずれの書込みも赤鉛筆による。

【資料4】活字翻刻版との異同①（衆議院憲政記念館所蔵原本／2016年3月28日筆者撮影）



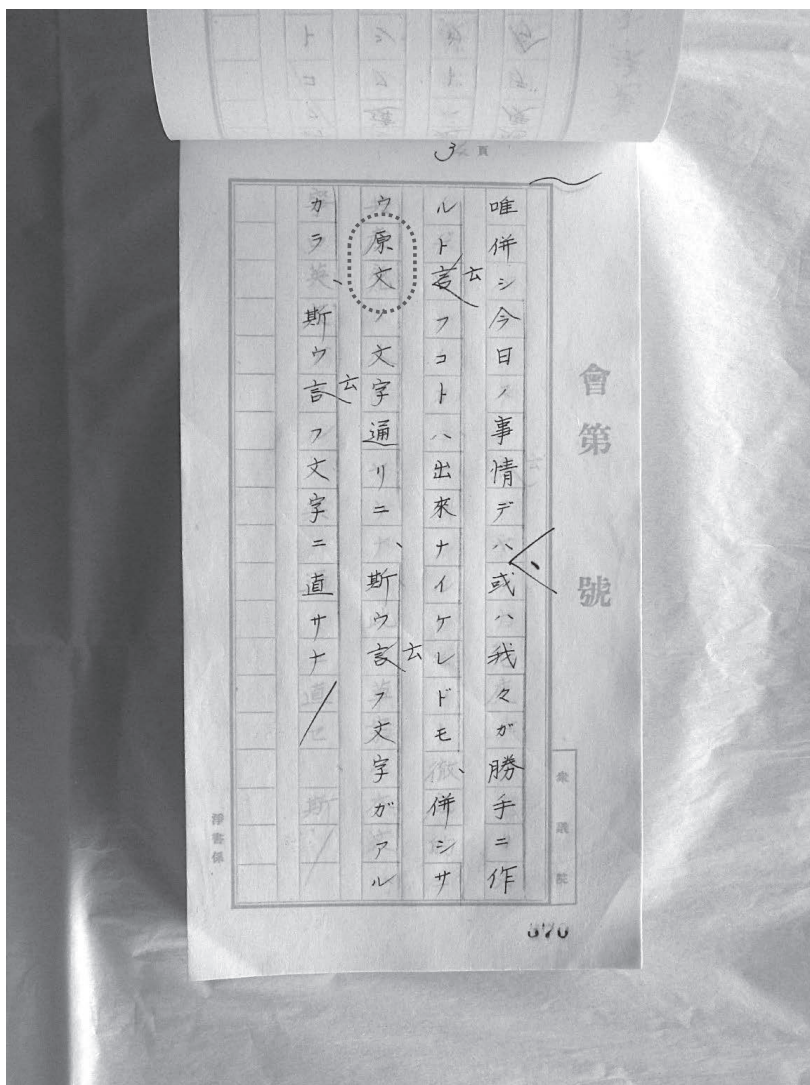
* 第2回小委員会における笠井重治委員発言（原本第1冊352頁：活字翻刻版21頁上段）。なお、点線の丸囲みは筆者が挿入した。

【資料4】活字翻刻版との異同②（衆議院憲政記念館所蔵原本／2016年3月28日筆者撮影）



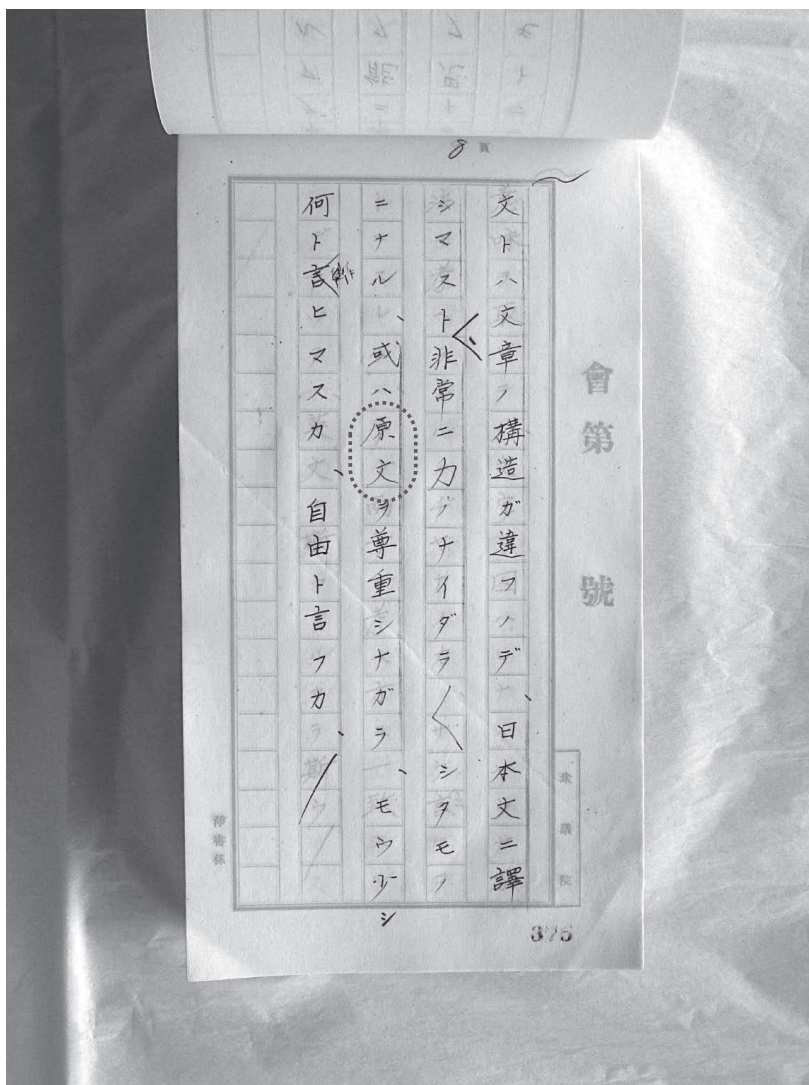
* 第2回小委員会における笠井重治委員発言（原本第1冊365頁：活字翻刻版21頁下段）。なお、点線の丸囲みは筆者が挿入した。

【資料4】活字翻刻版との異同③（衆議院憲政記念館所蔵原本／2016年3月28日筆者撮影）



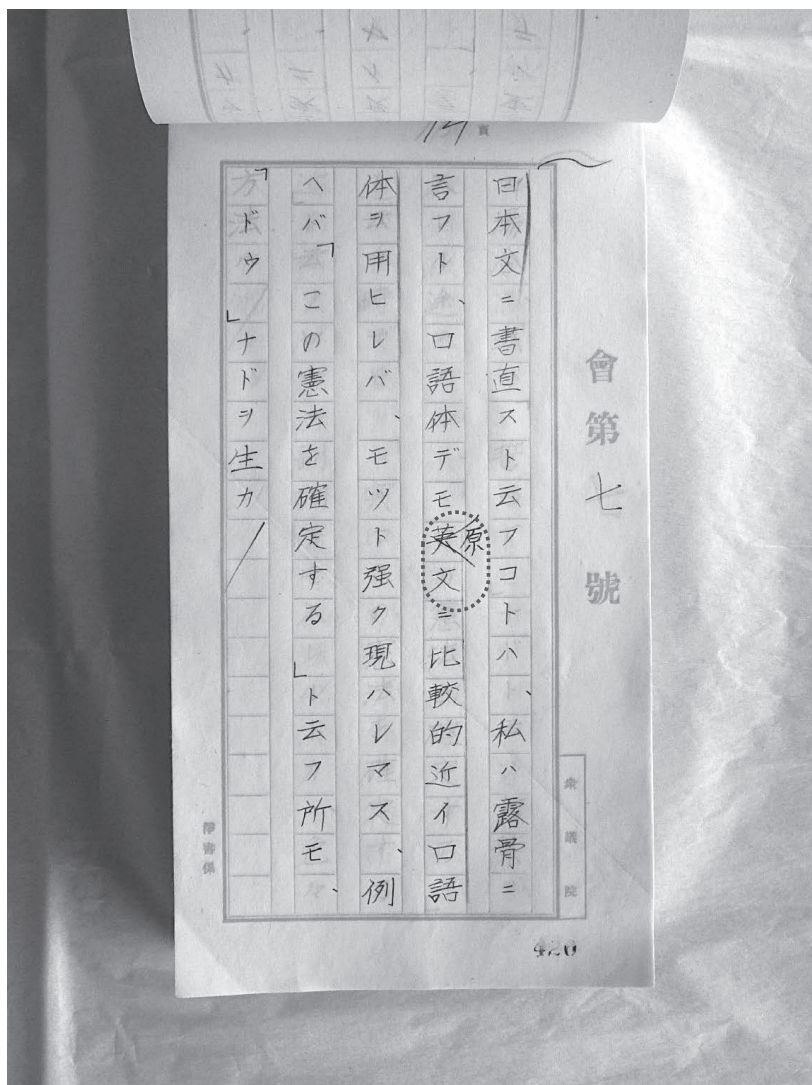
* 第2回小委員会における森戸辰男委員発言（原本第1冊370頁：活字翻刻版21頁下段）。なお、点線の丸囲みは筆者が挿入した。

【資料4】活字翻刻版との異同④（衆議院憲政記念館所蔵原本／2016年3月28日筆者撮影）



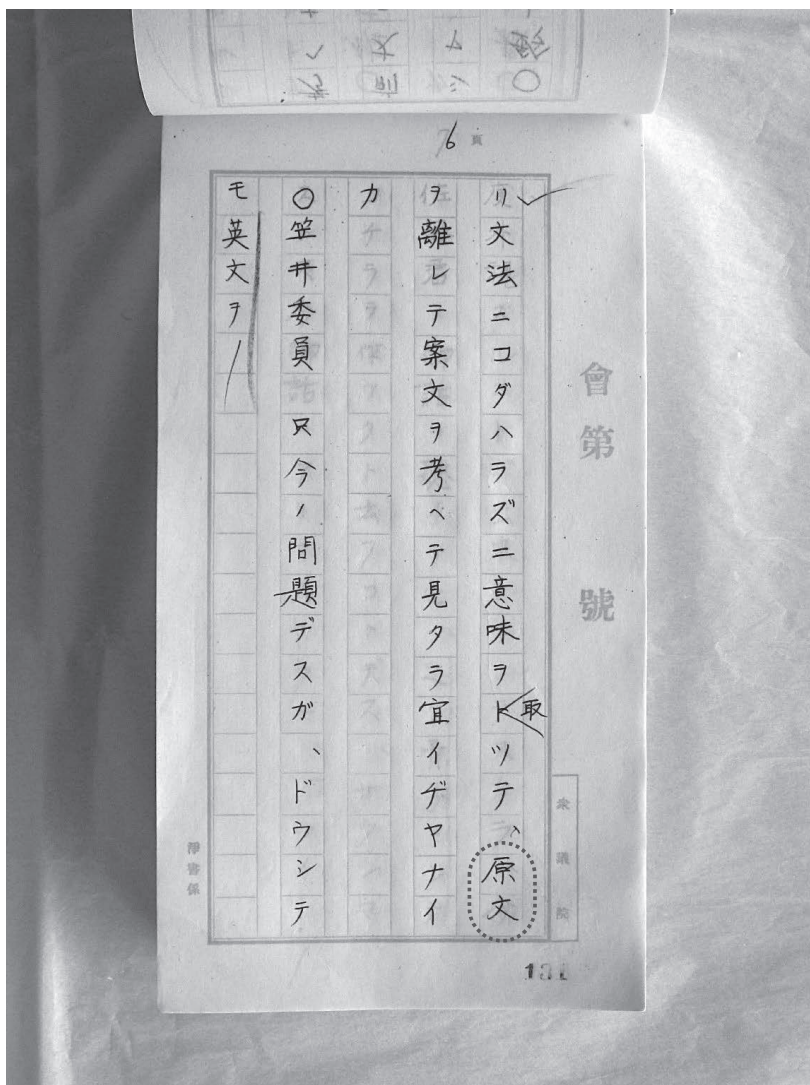
* 第2回小委員会における森戸辰男委員発言（原本第1冊376頁：活字翻刻版22頁上段）。なお、点線の丸囲みは筆者が挿入した。

【資料4】活字翻刻版との異同⑤（衆議院憲政記念館所蔵原本／2016年3月28日筆者撮影）



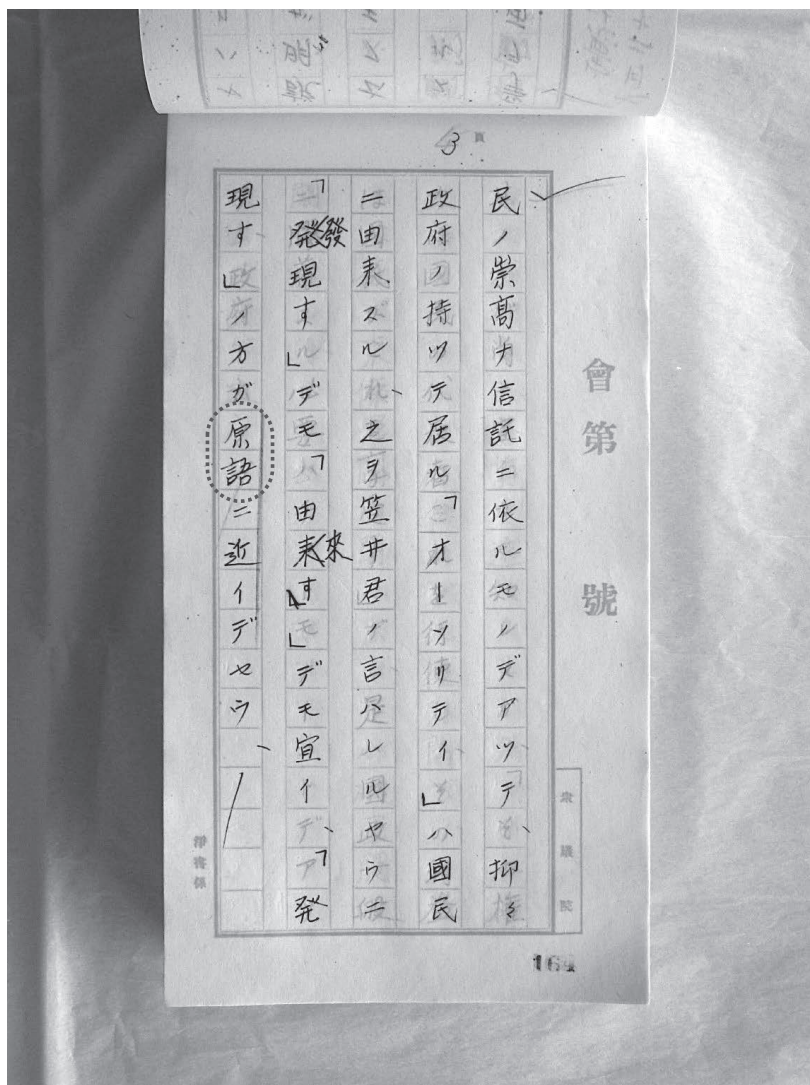
* 第2回小委員会における北吟吉委員発言（原本第1冊420頁：活字翻刻版23頁下段）。なお、点線の丸囲みは筆者が挿入した。

【資料4】活字翻刻版との異同⑥（衆議院憲政記念館所蔵原本／2016年3月28日筆者撮影）



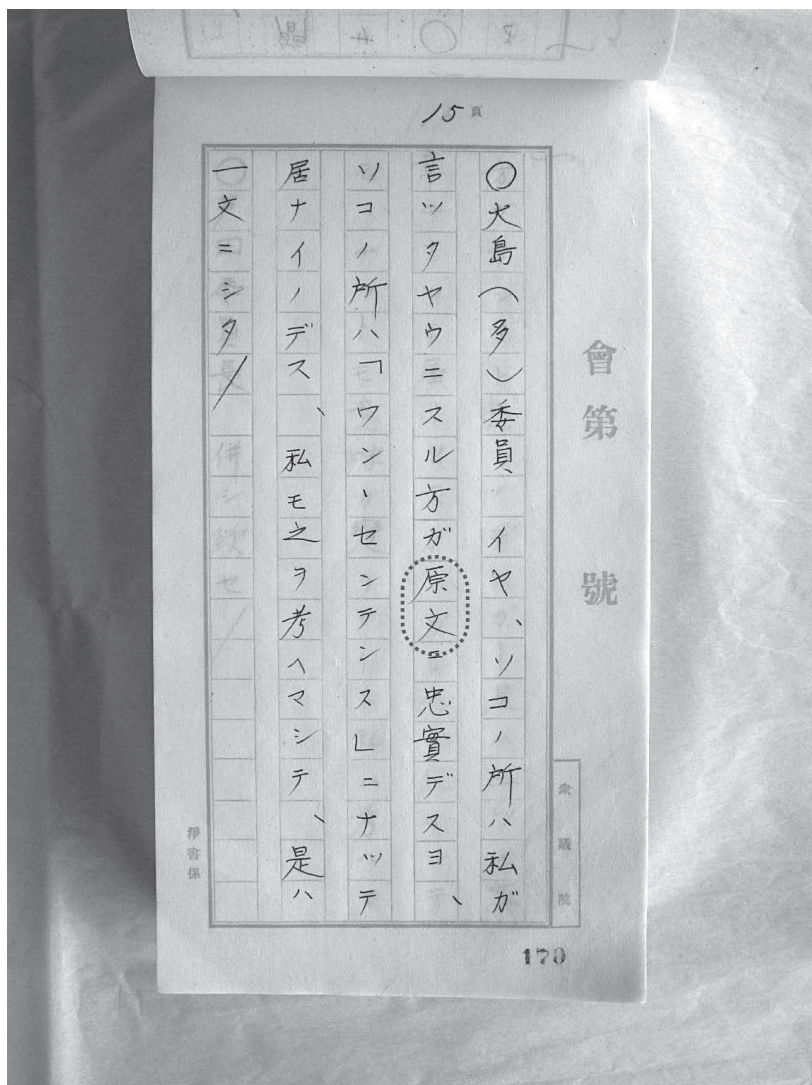
* 第3回小委員会における鈴木義男委員発言（原本第2冊131頁：活字翻刻版56頁中段）。なお、点線の丸囲みは筆者が挿入した。

【資料4】活字翻刻版との異同⑦（衆議院憲政記念館所蔵原本／2016年3月28日筆者撮影）



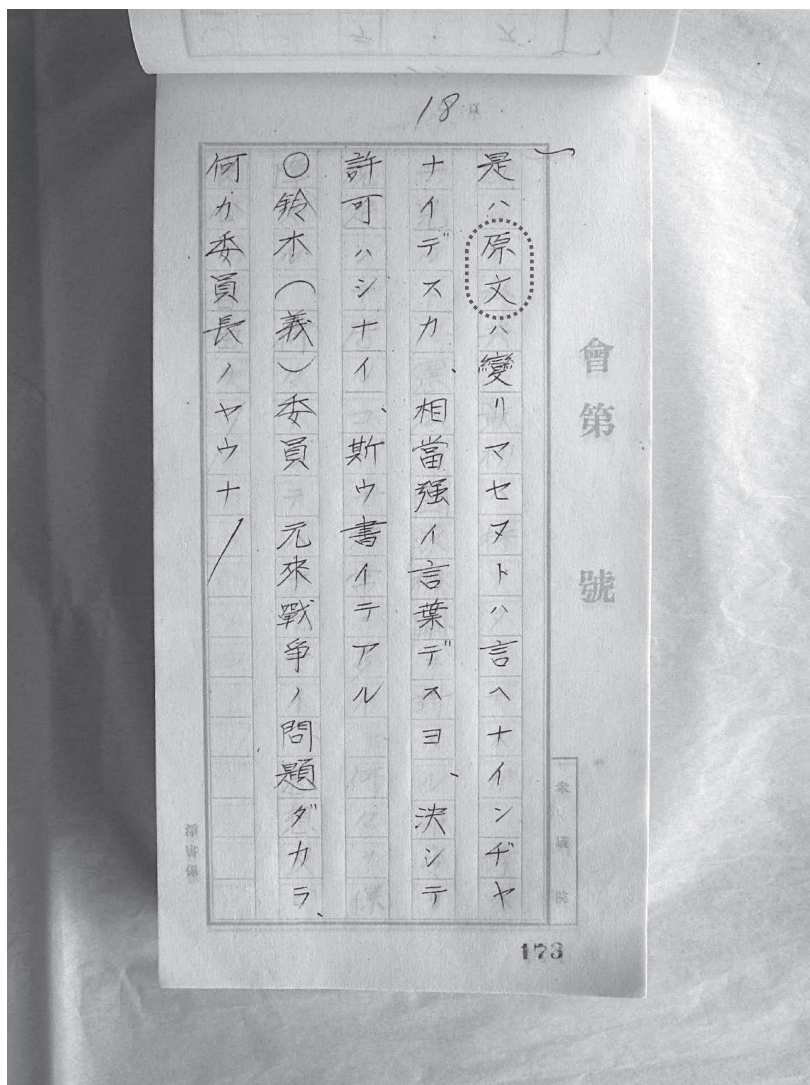
* 第3回小委員会における北吟吉委員発言（原本第2冊164頁：活字翻刻版57頁下段）。なお、点線の丸囲みは筆者が挿入した。

【資料4】活字翻刻版との異同⑧（衆議院憲政記念館所蔵原本／2016年3月28日筆者撮影）



* 第7回小委員会における大島多藏委員発言（原本第6冊170頁：活字翻刻版192頁）。なお、点線の丸囲みは筆者が挿入した。

【資料4】活字翻刻版との異同⑨（衆議院憲政記念館所蔵原本／2016年3月28日筆者撮影）



* 第7回小委員会における芦田均委員長発言（原本第6冊173頁：活字翻刻版192頁上段）。なお、点線の丸囲みは筆者が挿入した。

注

- 185) 1995年9月30日付の読売新聞朝刊1頁、朝日新聞朝刊25頁、毎日新聞朝刊15頁、産経新聞朝刊1頁を参照。
- 186) 読売新聞1995年9月30日付朝刊1頁参照。
- 187) 英訳速記録の発見・報道などで長くこの問題を報じてきた産経新聞は、当初、「20年前、本紙の米極秘文書取材班が発掘した芦田小委員会の秘密会議事録の英訳文書ではなく、今回、公表された和文の原本にある部分は、確認できた限りで25カ所。」とする独自の調査結果を示していた(The Sankei Archives 収録の1995年9月30日付朝日記事「『日本の将来』冷静に見据える」参照。なお、傍点筆者)。ただし、マイクロフィルムに記録された同日の紙面を確認すると、傍点部分は「41カ所」と改められている点が注目される(例えば、産経新聞1995年9月30日付朝刊5頁(東京12版)参照)。このことは、「41カ所」という数字が新聞社の独自の調査結果に基づくものではなく、取材情報に基づくものであるとの推測を裏づけるものと考えられる。
- 188) 1995年9月30日付の読売新聞朝刊1頁、産経新聞朝刊1頁。
- 189) 削除根拠としてのプレス・コードに言及するものとして、1995年9月30日付の読売新聞朝刊3頁、毎日新聞朝刊15頁。
- 190) 例えば、速記録公刊から約10年後に編まれた西修『日本国憲法成立過程の研究』(成文堂、2004年)は、第2部において「憲法9条の成立経緯」を取り上げ、芦田修正だけでなく同条の発案段階から成立までを詳細に論じるが、速記録の削除問題については僅かに新聞報道に言及するに止まっている(279頁、294頁)。
また、同時期に復刻された小委員会速記録の解説である古関・前掲注(12)も、「四、英訳版との比較」という独立した項目を設けてこの問題を取り上げるが、「GHQに知られたくないと判断された箇所は翻訳に当たり削除されている」(11頁)と述べるのみで、プレス・コードの問題には言及していない。
- 191) 例えば、朝日新聞1995年9月30日付朝刊25頁。
- 192) この度の芦田小委員会速記録原本の閲覧・利用にあたっては、衆議院憲政記念館課長補佐(当時)の岩間一樹氏による多大なるご助力を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。
- 193) 例えば、古関・前掲注(11)『日本国憲法の誕生』299頁以下は、この金森発言に注目して、「芦田修正とは、実は『金森修正』ではなかったのか」としている。また、進藤・前掲注(110)220頁以下も、「金森発言の衝撃」として、これを重視する。
- 194) 芦田は、1946年2月19日の定例閣議において、日本政府が同月13日にマッカーサー草案を提示され、その受け入れを求められた旨の報告を聞いている。芦田・

- 前掲注（101）『芦田均日記 第一巻』75頁以下参照。
- 195) 例えば、佐藤・前掲注（56）は、「皇室財産関係の修正について、先方の意向を伝えたときの小委員会の空気はまことに深刻なものがあり、自由党の廿日出委員などは発言中涙声で声をつまらせてしまったという場面もあった」（157頁）というエピソードを紹介している。
- 196) “Press Code For Japan.” (SCAPIN-33, 19 September 1945.) (国立国会図書館憲政資料室所蔵マイクロフィルム) [請求記号：SCA-1 R2／永続的識別子：<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9885095>]
- 197) 例えば、衆議院事務局・前掲注（58）10頁、鈴木・前掲注（63）258頁以下参照。
- 198) “Freedom of Press and Speech” (SCAPIN-16, 10 September 1945.) (国立国会図書館憲政資料室所蔵マイクロフィルム) [請求記号：SCA-1 R2／永続的識別子：<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9885078>] ただし、同資料にはタイトルが見られない。
- 199) 例えば、1945年10月15日付の『終戦事務情報第3号』には、「9月10日附の『メモランダム』にも拘はらず、其の後9月14日には同盟通信社の海外向短波放送の停止命令を受け、9月18日には朝日新聞が、9月19日には日本タイムスが夫々1日の発行停止を受けた」との記述が見られる（9頁・傍点筆者）。荒敬編『日本占領・外交関係資料集第1巻——終戦連絡中央事務局・連絡調整中央事務局資料——』（柏書房、1991年）17頁。
- 200) 停止処分の経緯については、江藤淳『閉ざされた言語空間 占領軍の検閲と戦後日本』（文春文庫、1994年）169頁以下に詳しい。
- 201) 「ゴードン W. プランゲ文庫ブログ」(<https://prangecollectionjp.wordpress.com>) 内の2013年7月21日付記事「検閲：民間検閲局文書」に当時の英文及び邦文の資料を確認することができる（傍点筆者）。
- 202) 山本武利『GHQの検閲・諜報・宣伝工作』（岩波書店、2013年）86頁参照。
- 203) 有山輝雄「占領軍検閲体制の成立—占領期メディア史研究」成城大学コミュニケーション紀要第8輯（1994年）50頁参照。
- 204) GHQによる公式記録として、竹前栄治・中村隆英監修（古川純・岡本篤尚訳）『GHQ 日本占領史 第17巻 出版の自由』（日本図書センター、1999年）24頁以下参照。また、古川純「占領と報道検閲——言論・報道の自由の評価と再編成——」樋口陽一・高橋和之編『現代立憲主義の展開 上』（有斐閣、1993年）682頁以下も参照。
- 205) 山本・前掲注（202）3頁。
- 206) もっとも、GHQは、出版物のみならず「すべての郵便物」をも検閲対象とし、広範な郵便検閲を実施したため、検閲の存在自体を認識していた国民は少なくな

- いであろう。なお、この点については、裏田稔『占領軍の郵便検閲と郵趣』（日本郵趣出版、1982年）、及び、甲斐弦『GHQ 検閲官』（葦書房、1995年）が参考となる。
- 207) 資料名無し。CCD #183 (GHQ/SCAP RECORDS BOX No.8663) (国立国会図書館憲政資料室所蔵マイクロフィッシュ) [請求記号：CIS-01201]。本資料は日付不明のタイプ印刷であるが、松浦総三『増補決定版 占領下の言論弾圧』（現代ジャーナリズム出版会、1974年）59頁以下によると、「プレス・コードにもとづく検閲の要綱にかんする細則」と呼ばれ、ガリ版刷りのものが新聞社や出版社に通達されたという。なお、右崎正博「占領軍による言論政策と言論の自由」早稲田法学会誌24巻（1974年）471頁以下も参照。
- 208) このような痕跡を残さない検閲方式は、GHQ による出版検閲の特徴として言及されることがある一方、既に戦前の日本においても同様の方式が実施されていたとの重要な指摘がある。松浦・前掲注（207）61頁以下参照。
- 209) 荒敬編『日本占領・外交関係資料集第2巻——終戦連絡中央事務局・連絡調整中央事務局資料——』（柏書房、1991年）59頁収録の1946年1月22日付終戦連絡各省委員会議事録2頁（傍点筆者）。
- 210) 内閣作成『公文類集第七十編 昭和二十一年 卷四十一』（国立公文書館本館所蔵）収録の「日本ノ遵守スベキ出版準則ニ関スル件」（昭和21年内閣閣甲第20号の原議）によれば、同通牒は内閣書記官長名で、法制局長官、賞勲局総裁、通信院総裁、戦災復興院総裁、枢密院書記官長、会計検査院長、行政裁判所長官、貴族院書記官長、衆議院書記官長、戦争調査会事務局長官に送付された様子である〔請求番号：類02996100〕。
- 211) 枢密院書記官長宛の実物を内閣作成『枢密院文書・雑件・昭和二十一～昭和二十二年・枢密院秘書課』（国立公文書館本館所蔵）のなかに、また、会計検査院長宛の実物を会計検査院総務科作成『内閣通牒・自昭和21年至昭和24年』（同分館所蔵）のなかに、それぞれ確認することができる〔請求番号：枢00069100、平15会計00065100〕。なお、両資料は同一文面であり、手書きのプレス・コードが添付されている。
- 212) 衆議院書記官長宛の実物は確認できなかったが、前掲注（137）の鈴木隆夫関係文書75-2に引用されたものは、枢密院書記官および会計検査院長宛のもの一字一句同じである（46-47頁）。なお、同資料は、森・前掲注（11）153頁にも見られる。
- 213) 鈴木隆夫・前掲（63）258頁参照。
- 214) 第12回国会衆議院議院運営委員会議録第2号（1951年10月15日）2頁（傍点筆者）。

- 215) なお、大池に次いで第３代衆議院事務総長を務めた鈴木隆夫（1955年11月～1960年7月）の頃までは、議院事務局も発言削除の是非に言及していたとされ、「そんな言葉で削除なんてするのはおかしいですよ、それはやはり削除する必要はありませんと事務総長が言えば、それが通った」という。赤坂幸一・奈良岡聰智編著『今野或男オーラル・ヒストリー 国会運営の裏方たち——衆議院事務局の戦後史——』（信山社、2011年）389頁以下参照。
- 216) 憲法調査会編『憲法制定の経過に関する小委員会第８回議事録（1958年7月10日）』（大蔵省印刷局、1958年）13-14頁参照。
- 217) 第11回国会参議院議院運営委員会会議録第１号（1951年10月9日）6-7頁参照。
- 218) 第10回国会衆議院会議録第５号（1951年1月27日）1頁以下参照。
- 219) 天川・前掲注（73）102頁以下参照。なお、川上は、この演説が原因となり懲罰委員会にかけられたが陳謝を拒否したため、日本国憲法下で最初の議員除名の対象となった（同年3月29日除名決定）。
- 220) 第10回国会衆議院会議録第６号（1951年1月28日）9頁以下参照（傍点筆者）。
- 221) 例えば、川上発言の削除根拠としてプレス・コードに言及するものとして、第10回国会衆議院議院運営委員会会議録第11号（1951年1月31日）2頁以下、第10回国会衆議院外務委員会会議録第７号（1951年2月28日）18頁などを参照。
- 222) 白井誠『国会法』（信山社、2013年）90頁以下参照。
- 223) 前田英昭「国会の会議録における『削除』」駒澤法学2巻3号（2002年）76頁（傍点筆者）。
- 224) 小川国彦『総理大臣の「私生活」はなぜ徹底追求できないのか』（三一書房、1993年）37頁参照。なお、同書は、帝国議会会期の衆議院における議事速記録の削除についてもその実態解明を試みている（第２部参照）。
- 225) 毎日新聞1995年9月30日付朝刊15頁（傍点筆者）。
- 226) 朝日新聞1995年9月30日付朝刊25頁（傍点筆者）。
- 227) 朝日新聞1995年9月30日付朝刊3頁（傍点筆者）。
- 228) 筆者が閲覧した前掲注（15）の衆議院事務局内部資料のなかには、これに該当する聞き取りメモは見られなかった。
- 229) 初代衆議院法制局長（1948年7月～1952年8月）を務めた入江俊郎が小委員会速記録を公開前に閲覧していた事実は、このような推測の傍証にもなる。入江・前掲注（23）409頁参照。
- 230) 山本・前掲注（202）7頁（傍点筆者）。
- 231) 森・前掲注（11）155頁。
- 232) 衆議院事務局内部資料「帝国憲法改正案特別委員会の小委員会における速記録の印刷及び閲覧に関する件（三〇、二、一三）」（1955年2月13日）2頁。

- 233) 芦田・前掲注(121) 18頁。
- 234) 1955年5月9日の月曜会速記録による。赤坂幸一編集・校訂『初期日本国憲法改正論議資料——萍憲法研究会速記録(参議院所蔵) 1953-59』(柏書房、2014年) 568頁。
- 235) また、後年のものではあるが、佐藤功も、「記録の削除は議会側が委員の微妙な言い回しについて GHQ 側にいらぬ疑いをかけられないように過剰に自制したのでは」との推測を示していた。毎日新聞1995年9月30日付朝刊15頁。
- 236) 前掲注(137) 鈴木隆夫関係文書75-1。
- 237) 大池とは対照的に、英訳速記録における削除がプレス・コードによるものであったことを強調する鈴木は、「プレスコードはたとえそれが連合軍の命令であろうと、国内的には政府が各官庁に通牒した命令であつて、それを守るのは当然のことである。日本国に発せられた命令は、日本の国家機関がそれを守るのは当然であり、国民もまたそれに従うべきものであろう。」との主張を展開している。鈴木・前掲注(63) 260頁。
- 238) 千代田区立千代田図書館編(浅岡邦雄監修・解説)『千代田図書館蔵「内務省委託本」関係資料集』(千代田区立千代田図書館、2011年) 8頁。同資料集は、既に冊子体としての販売を終了しているが、千代田区立図書館のホームページ上で電子書籍版を参照することができる(<http://www.library.chiyoda.tokyo.jp/findbook/naimusho/reference/>)。なお、資料の利用に際して、千代田区図書館の河合郁子氏にご助力をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。
- 239) 『速記録』まえがき1頁(傍点筆者)。
- 240) 鈴木・前掲注(9)の(三) 81頁参照。
- 241) かつての速記録が速記者らによって記録される媒体であった以上、「知らない言葉は聞こえない」という当たり前の事実、記録上の盲点として常に付きまとう問題といえるであろう。この点につき、菊地正憲『速記者たちの国会秘録』(新潮新書、2010年) 46頁以下は、速記者らの貴重な証言を紹介しており興味深い。
- 242) 例えば、『速記録』29頁中段の高橋泰雄委員長代理発言(第2回小委員会)や、同115頁上段の北聆吉委員発言(第4回小委員会)は、この例に数えられるであろう。
- 243) 『速記録』23頁下段。なお、このペン書きの字句修正は北の発言に対するものであるが、速記録ではその直前に英文草案を意味する「原文」という表現が3度繰り返されているため、これに合わせようとしたものと思われる。
- 244) 小委員会速記録公開当時の衆議院議長であった土井たか子は、公開にあたり記者団との懇談を行ったなかで、「束縛を受けず、非情に熱心に討議している様子がはっきりわかる。押し付けや強制でつくられたわけではない」(朝日新聞1995

年 9 月 30 日付朝刊 2 頁）と述べているが、速記録原本自体を詳細に確認していたかは分からない。

また、当時の衆議院事務総長であった谷福丸は、自身のオーラル・ヒストリーのなかで小委員会速記録の公開経緯に 2 回言及しているが、当然ながら速記録の内容については触れていない。赤坂幸一・中澤俊輔・牧原出編著『谷福丸オーラル・ヒストリー 議会政治と 55 年体制——衆議院事務総長の回想——』（信山社、2012 年）151-152 頁、349-350 頁参照。

- 245) 元衆議院憲政記念館主幹の伊藤光一によれば、1998 年当時にはまだ、閲覧の制度自体がなかったという。また、特別展の準備に追われ職員の入れ替わりもあることから、所蔵資料の整理が進まず、資料目録には未掲載の所蔵資料があったというが、組織運営の基本が当時と大きく変わっていないとすれば、現在も類似の状況が続いていることが推測されよう。近代日本史料研究会「研究会速記録（1998 年 3 月 19 日）」（http://kins.jp/pdf/10ito_k.pdf）197 頁以下参照。

- 246) 国立国会図書館電子展示会「日本国憲法の誕生」〈高見勝利監修〉（<http://www.ndl.go.jp/constitution/>）、「国立国会図書館デジタルコレクション」（<http://dl.ndl.go.jp>）及び、「国立公文書館デジタルアーカイブ」（<https://www.digital.archives.go.jp>）による日本占領関係資料のインターネット公開は、史資料へのアクセスを容易にただけでなく、研究の裾野を広げるという意味においても大きな意義をもつものであろう。そして、これらの史料のデジタル化の前例に鑑みれば、少なくとも技術面での課題はクリアできるように思われる。